
何だかんだで生きている

ntaku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何だかんだで生きている

【Nコード】

N4104W

【作者名】

ntaku

【あらすじ】

借金と酒にまみれた父が亡くなり、若くして独り身になってしまった雪音。父の死後ドタバタとした後始末を終えた彼女は塞ぎこんだまま過ごしていた。趣味も就活もヤル気にならず「腐って」いた彼女に舞い込んできたのはとあるイベント会社の求人案内。ヤケクソ気味に応募した翌日から彼女の人生は一変する…
異国の地で繰り広げられるちょっとした非日常の積み重ねを綴る連載形式の長編物語

1話原稿用紙20枚前後、3ヶ月ぐらいをめぐりに20話強ほど投稿
させて頂きます。

ご興味がありましたらお付き合い願えれば幸いです。

01・『父が死んだ。苦勞が残った』

「（あいつが死んでほっと出来たのは、せいぜい二時間ぐらいかな……）」

雪音は祭壇の片付けが終わった居間を眺めながらぼんやりと考えていた。

母親は物心付く前に亡くなり、唯一の肉親であった父も他界した。本来ならもつと感情を乱すものと、彼女は想像していた。

実際に襲ってきたのは、やっと一人になれたという安堵と、これからどうしようかという焦りの二つ

「自業自得だから」

築四十五年のぼろ屋で営まれた葬式で、高校三年生にして独り身になった雪音は父親の人生を総括するようにつぶやいた。

全面的に同意する父の友人達と、義務で参列した同級生達の凍り付いた表情の対比は、彼女にとって目まぐるしい時間の中で唯一楽しめた出来事だった。

他人にはわからないだろうがこの父親、借金まみれで酒癖が悪く、一人娘に苦勞のかけっぱなしの人生を歩んでいた。死因も多臓器不全で、酒に溺れた結果と彼女は思っている。

同じ年に向けて父が死んで悲しみに暮れる娘など、彼女が演じている余裕などなかった。

「（とりあえずいなくなって寂しいと言っとけばよかったのかな）」

目まぐるしかった非日常の時間が徐々に現実が変わっていく。向き合わなければ行けないことは山ほどあるというのに、彼女は骨壺の前に正座してぼんやりとしていた。

こんな小さなものに騒がしかった父が詰まっていることに、妙な違和感を覚えてしまう。

「ふう…」

頭の中のもやもやを振り払うよう、雪音はお骨から離れブレザーのネクタイを緩めた。

徹夜続きで目がかすれている。眼鏡を外してまぶたを押さえると、ぐらつと血の気が引くような感覚を覚えた。

「はは、誰これ…」

鏡で顔を見ると雪音は少し驚いた。自分の顔があまりに無表情だったからだ。

少し瘦けた頬と目の下の隈に苦笑すると、彼女は父の友人が談笑しているリビングに移動した。

途中台所に寄り、買い込んであった瓶ビールをテーブルに置くと、

「おお…悪いね雪ちゃん」

と、ちよつと人には言えない商売をしているおじさんが少しはにかむ。

「もう父もいませんし、飲みきってください」

雪音はあまり声に抑揚を付けず言った。

父の悪癖もその娘の苦勞も知ってる故に、少し気まずい思いを感じているようである。

若い頃二人でつるんで犯罪すれすれの金稼ぎをしたとかしてないとか　まあそういうことを武勇伝のように語る人で、親戚との付き合いのない彼女にとっては文字通り親しい「おじさん」である。

「ああいう奴ほど長生きすると思ってたんやけどな」

「いろいろ苦勞させられましたが、思い起こすと貴重な経験でした」

雪音はソファーにもたれ、テレビのニュースを見ながらそんな大人の話聞き流していた。

酒の入った友人達は故人の暴露大会を始めている。和気あいあいと「金に頓着のない奴だがい奴だった」とか「酒癖悪いが普段は優しかった」とか　当たり障りなく故人を振り返っている。

「（そりゃ、血が繋がってなきゃ…そんな総括をするのも楽でしょうね）」

借金取りに玄関をペンキまみれにされたり、電話で脅迫されたり、ある日お巡りさんが苦渋の表情で自分に同行を求めてきたり……

「……」

テレビの画面は短く孤独死、親の虐待、殺人事件、と画面が切り替わっていく。最後の二ユースには『別れ話のもつれ』と簡潔なテロップが添えられていた。

「みんな気が短いな……」

雪音は後ろで騒ぐ大人達の声に紛れるよう、小さくつぶやいた。

「愛憎があるからこそ人が人を殺せるし、血の繋がりがあからこそ無関心を装えない……なんてね」

雪音は口元を歪めた。自分の発した言葉にひどい自己嫌悪を覚えたのだ。

「（ほら、私だって人のこと言えないじゃない……）」

二ユースを適当に切って当たり障りのないことを思うことと、後の喧噪……その二つに実質的な違いがない。

他人なんてそんなもの……

嫌に感傷的になってる自分に、雪音の感情はさらに沈み込んでいく。大人達はそんな彼女には気付かず馬鹿騒ぎを続けていた。

「しかし雪ちゃんも大変だな、これから」

「……」

「親父がああだったけど、ぐれないでよく頑張ったよ」

そう、他人は気軽に総括出来る。

父子家庭の父親が借金まみれで酒飲みで、親戚中から嫌われ者で、トラブルメーカーで、二月に一度しか家に給料を入れない。そんな家庭に育った彼女に「頑張った」と気軽に声をかけられるのだ。

「大変なのは……これからも変わらないですけどね」

わき上がる感情を全て飲み込んで、雪音はそう返すことしか出来なかった。

「そつだよ、俺達が雪ちゃんの仕事探してあげなきゃ」

「サーカスなら紹介出来るな……」

「雪ちゃんぐらいべっぴんやったら、お店ぎょうさん紹介出来るで、狭いリビングが爆笑の渦に包まれる。」

「それでもない父にはろくでもない友人が集まるものだ、雪音は思った。」

「あはは、考えておきますね……」

「冗談じゃない……酔っ払いと獣の世話はもうたくさんだ……」

雪音は引きつった笑顔を浮かべ終わると、そこで力が抜けたように体を横に倒す。

「……」

父が倒れ、そのまま逝ってしまった一週間の最後に、とうとう眠気のピークがやってきたらしい。

彼女の意識の向こうでは葬式か宴会かよくわからない喧噪は途切れることなく続いていた。

「……ん……っ」

雪音は横たわったまま小さく身をよじった。いつの間にかソファ上で寝ていたらしく、薄い毛布が掛けられていた。

時計は彼女が最後に確認してからもう四時間はたっている。

慌てて起き上がると、誰かが台所で洗い物をしてることに気が付いた。

「長田先生？」

雪音は眼鏡をかけ直し台所に声をかけた。見るとスーツの上着を脱いで彼女のエプロンを付けた男が振り返る。

「ああ……おはよう、洗い物は僕がやっというたよ」

そう言われて彼女が周りを確認した。

「他の人は……」

宴会会場と化したリビングが綺麗になっていることに目を丸くしながら、雪音が尋ねる。

「雪ちゃんを起こしちゃ悪いから、みんなよろしく言っというって」

男と雪音は目を合わせ、苦笑いした。

あの人達のこと、飲むにいいだけ飲んで片付けを彼に任して退散したのだろう。

熊の絵の描かれたかわいいエプロン姿が滑稽だが、彼は父の生前、厄介事の面倒を一拳に見てきた弁護士である。

「私…本当は寝るつもりなかったのに……ごめんなさい」

「いいよ、僕もどうせ独り身だから慣れてるし、これぐらいね」

父の友人の中で一番の常識人と雪音は思っていた。

「これから大変だろうけど、僕が出来る範囲では協力するからね」

少し安堵する雪音。父が死んでからやって来る面倒ことは彼女の手には負えなかった。葬式の準備から始まり死亡診断書や保険の手続き、その他

身近にまともな大人が一人いたからこそ高校生の自分でも何とか終えることが出来たのだろうと改めて思う。

「それで、ちよっとシビアな話になるけど…いいかな」

雪音は表情を硬くしながら頷く。

二人はリビングに移動して向かい合って座った。

「葬儀の後にこういう話をしなきゃならないのも…」

そう言いながら彼は鞆から書類の束を取り出す。

「まあ…正樹さんらしいというか…雪ちゃんには辛いかもしれないけど」

「大丈夫です。父が死んだらこうなることは覚悟してましたから」

雪音には話の中身はわかっていた。父の遺産のことである。

書類に目を落とすと小さな黒三角が彼女の目に飛び込んできた。すなわち負債のこと

生前から彼女はそれとなく目の前の弁護士から伝えられていたのだが、残される遺産と負債の関係はマイナスとなっている。父の遺産を引き継ぐと自動的に借金も引き継がれるというわけだ。

「正樹さんは親戚との付き合いもないし、そのね…」

彼はひどく言いにくそうにつぶやいた。

「父の借金を相続してまで私を引き取る人はいない」

「…うん」

数秒の間、沈黙が続いた。彼は雪音が表情一つ変えないことに驚きはしなかったものの感傷的になってしまった。

一方雪音が父の臨終が告げられた瞬間浮かんしたのは、弁護士を呼ばなくてはということである。それほどまでに予想してた内容なのだ。

「遺産放棄しなきゃいけませんね」

「うん…もちろん雪ちゃんが今までバイトして生活支えてたから家財道具は雪ちゃんのものとして残るせるし…」

正樹さんの物でごまかせるものは現金化して雪音ちゃんのお金にしちゃうから…」

「……」

「でも…住宅ローン残ってるこの家まで残すのは…無理があるよね…」

雪音は目の前の弁護士が自分と目を合わせようとしないことを、少し面白く感じていた。

おそらく何らかの罪の意識でもあるのだろう。

彼女としては別にこの家や財産に執着があるわけではない。父から何か残されることを期待していたわけでもない。ただ親が子供に負債しか残せなかった事実を、周りにいた「大人」として認めたくなかったのだろうか

そんなことを彼女はぼんやり考えていた。

「（ただ、当座の生活を考えると…家賃生活は辛いよね…）」

雪音は死んだような目をしながら書類をぱらぱらめくっていた。

「書類はサインして投函するだけでいいように用意したから…よく内容を読んで、これでよかったら僕に送ってくれるかな」

「…はい」

内容は生前抱えていた借金の一覧が中心になっているのだろう。こんなものは流し見でいいと、彼女は書類の束を封筒に放り投げる。

「とりあえず疲れただろ…布団でゆっくり寝て、落ち着いてから…いろいろ考えても遅くないから」

「はい、いろいろありがとうございました」

雪音は立ち上がり、小さくお辞儀をした。そのまま最後の客人を見送ると、静かになった部屋にテレビの音が小さく響いてきた。リモコンを探すのも面倒と彼女はワイシャツを乱暴に脱ぎ捨てると、下着姿のままソファに倒れ込むように寝そべった。床に落ちた毛布を羽織ると再び眠気が襲ってくるようだ。

今、家にいるのは彼女と父だった骨壺一つ。墓を用意する余裕もなくしばらくはお骨と同居したままの生活となる。

「……」

初めて一人になった実感が、雪音の中でゆっくりと湧いてきた。

葬式が終わって最初の日曜日、雪音が家を引き払う日である。

友人達が手伝いにやってきて引越準備が着々と進んでいる。

「はあ…」

その作業の手を止め、雪音は辺りを見回した。父の言いつけで「避難」と称して家の荷物を一晩でまとめた経験は何度もあり、引越し自体は苦にはならない。たとえ世間がそれを夜逃げと呼ぶそれも、子供の頃は彼女にとってちょっとしたアトラクションだった。だが今は彼女自身そんなことを楽しめるほど子供でなければ、今回は騒動の主役でもない。

そのことに妙な感傷を持つ自分に嫌気が指していたのだ。

周りの人間は雪音の心情を知ってか知らずか、黙々と荷物を段ボールに詰めていた。

「（私、そんなに…怖く見えるのかな）」

雪音は口元を少し釣り上げた。前日久しぶりに登校した時の同級生の視線が少し辛く、その後の腫れ物を触るような態度と語り口を思い出したのだ。

大半の理由は葬儀席で例のおじさんと涙目でハグしたからである。ちよつとアレな職業を彷彿とさせる参列者と堂々と語らう彼女の姿は、同級生を畏怖させるに十分だっただろう。

「（今時…黒塗りのベンツとダブルのスーツはないよね）」

雪音はガクリとうなだれた。辛うじて保っていた緊張の糸はぷつりと切れて、演じるまでもなく悲しみに暮れる少女になってしまったのは言うまでもない。

「先輩…」

もつとも父親に苦勞をかけられて、死んでもなおそれに苦しめられていることを知っているのは若干の友人だけだ。大半の人には誤解されたままである。

「先輩つてば！」

「ん…？」

かけられた甲高い声に、雪音は気のない返事をした。

「先輩の部屋の荷物、これで最後ですか？」

声のした部屋に顔を向けると、『蔵封』と書かれた衣装ケースを抱えたまま一つ下の少女が立ちつくしている。

「ああ…後は処分するから」

「裁断前のレース生地も捨てるんですか？」

「うん、今は作る暇ないし……なんかやる気がね…」

雪音は消え入るような声でつぶやくと、食器を新聞紙に包む作業に戻った。

居間では男二人がテレビの搬送を始めている。一人は弁護士の長田で、もう一人は雪音と半年前まで交際していた同級生の男の子である。

全員が二人が家族の事情で別れたことを知っていたために、場の空気が冷め切っていた。

「あの…これも売っちゃっていいんですか、これ」

今度は父の部屋の方から声が響いてきた。雪音は予想した通りの反応に少し目を細める。その部屋には男物のスーツひと揃いや愛用

した時計などが、殴り書いた『売却』のタグが付いたまま放置されていた。弁護士立ち会いの下、既に所有権の確認は終わっている。雪音は抵当の入っていない父の物は全て処分するつもりだったのだ。

「でも…いいのかな…」

それでも後輩からしつこく確認されるのは、普通は形見は処分しないからであり 常識的なアドバイスである。

「夏代、しつこい」

「…はい」

有無を言わさぬ口調に、後輩の少女は凍り付く。

「……」

泣き出しそうな顔を見て、雪音は少し罪の意識を感じてしまった。「わかったわよ…」

雪音は小さく舌打ちしながら、ゴミ袋からアルバムを取り出す。

それはこの家に残された唯一のアルバムである。

汚物に触るかのように彼女はそれを運び出す予定のソファに放り投げた。

悪気があるとは思っていないのだが、父との関係を全て断ち切りたいと願う彼女には、それは余計な荷物そのものであった。

そもそも一軒家から引越す時点で、物は減らさなくてはならない事情がある。雪音はとりあえず古いアパートを二部屋借り、荷物と生活の場を分けることにした。

築三十年の和室六畳間という物件は、今時の女子高生が独りで住むには少し物憂いがあるがネズミが柱をかじった跡がないだけマシ……雪音はそう前向きに考えることにした。

「疲れた…」

段ボールの山を避けるように布団を敷くと、裸電球のスイッチをひねり消灯する。蛍光灯は持ってきたのだが付けるソケットがなか

ったのだ。

「（…おじさんから紹介してもらおう）」

多少雑な仕事と驚くような破格で工事をする業者なら、あの人なら知っているだろう、商売上。雪音は苦笑いをして布団に潜り込んだ。

死んだ父と全ての縁を切ろうと思ったところで、長田の弁護士といい、今となって唯一の親戚代わりのおじさんといい、そうした人の便宜に頼らなければ生活は出来ないのだ。

それは今後ゆっくり考えるところとして……暗くなった部屋のおかげで、うつとしい荷物の山が見えなくなり雪音この日初めてリラックスすることが出来た。枕と布団が心地よければそれだけで幸せと感じても罰はない。

部屋をどう整理して機能的に使うか、それを考えることもなかなか楽しいと彼女は思っている。父の反面教師で、基本的には計画を立てて実行することが好きなのである。

「……」

そこまで考えた思考が回った瞬間、雪音の頭は真っ白になってしまった。

計画を立てバイトして、学費に回して彼と大学に行く　　そういえばそんな未来を半年前まで持っていたのだ。

金縛りにあったかのように全身の力が抜け、雪音は身動きが取れなくなってしまった。

辛うじて動く首を振ると、月明かりに照らされ勉強机と本を入れた段ボールが目飛び込んでくる。中にはその計画のために買った受験の参考書が入っていることを彼女は思い出してしまった。

「……ああ」

谷底を真っ逆さまに落ちたかのように、雪音の気分が沈んでいく。

「大学なんて……」

親戚と付き合いがなく保証人を立てて奨学金を借りることは出来ない。親に先立たれた以上、一人で何が出来なのか

未成年である以上親権は誰かにつきまとう。親戚をたらい回しされたあげく渋々雪音の親権を認めた父の弟は、二十歳まで好きに生きてくれと兄の娘との関わり合いを拒絶している。

父が死んだ時点で雪音に残された道は自力で生きていくための手段を確保することなのだ。考えないようにしてきた現実が端々から襲ってくる。

「あ……うう」

どこまでも、あいつは私に苦勞をかけるのだ

雪音は布団を顔かぶり、父が死んだ時も流さなかった涙を流してしまった。

次第に嗚咽へと変わっていくそれを、無人に近いアパートで聞く者は誰もいなかった。

（第1話 終）

01・『父が死んだ。苦勞が残った』（後書き）

閑話休題その1

雪音「ということで第1話終了です」

夏代「つつか…なんですか、これ」

雪音「作者の思いつきで、せっかくだから解説の替わりに小話をやろうと引つ張り出されました」

夏代「ベタな…作中にキャラが作品を語るって、ある意味危険では？」

雪音「オチはもう決まってるから大丈夫だって」

夏代「先輩は幸せになるんですか」

雪音「…ふっ」

夏代「何ですか、その意味ありげな苦笑いは！？」

雪音「1話末でオチはこうですってのはさすがにね…」

夏代「それはそうですね、せっかく読んでくださった読者のためにも…」

雪音「2話では私がもつとずさんでいく予定」

夏代「…はい？」

雪音「ということで、よろしくね」

夏代「ぶりっ子ぶって私によろしくって言われても…あとずさむって」

雪音「まあ、もうしばらく私の不幸は続きます。もう一人のメインヒロインの登場は5、6話からなのでお楽しみ」

夏代「私、メインヒロインじゃないんですか！？」

雪音「うん、もしかしたらあと2話ぐらい終わったら出番しばらくないかも」

夏代「…しくしく」

雪音「ベタに地面に『の』の字を書いてる後輩はほっとして…こんな感じでしばらくお話を綴っていききたいと思っています。作者の

モチベーション維持のために連載形式にさせていただきました。多少なりとも面白いなと思っていただければ幸いです。最初はいきなり葬式があったり暗い展開ですが、暗いことも明るいこともごちゃごちゃにして最後にまとめていきます。拙い作品ですがちょっとでも面白いと思っていただけたら時々様子を見ていただければこの上ない喜びです。よろしく願います」

02・『現実から逃げた。布団は温かい』

「寒い……」

雪音の高校では同級生は大半が受験に突入し、年が明ける前に授業らしい授業は終わっている。当の彼女は葬式以降気分が滅入り学校はサボり気味となっていた。

最近は眠れないし食欲もないし、無理に登校して学校で倒れるわけにはいかない。

ついでに外出せず食べなければお金も使わないしダイエットにもなる

…そんな感じで彼女は自堕落な生活を正当化していた。

実際のところ、卒業のための出席日数は確保しているので、学校に行かないことは問題にならない。

眠れないことに関しては…とりあえず父親がお世話になってた内科の先生に薬をもらってやり過ごすことに決めていた。

「（車を買うぐらいの現金はあるし、しばらく休養しても罰は当たらないよね…）」

雪音はせっかく眠いのだから昼からでも寝ればよいと、布団に潜り込んだ。墮落してる自覚はあるが、反省する気はなかった。

情眠をむさぼるのは心地いい。いらいらしてこの先が不安で、そんな悲しんでる自分が許せない　雪音にとってようやく眠りに付ける瞬間は何にも代え難い物である。

「…うん」

微睡みの中、彼女はおぼろげに昔の家を思い出していた。あのぼろ屋も懐かしいが…段ボールに囲まれた二畳のスペースでも人間生きて行けるもの……

「（誰にも文句は言わせない、私頑張ってる、間違いないでしょ？）」

支離滅裂な言葉が頭の中を駆け巡っていた。

と、携帯の間拔けな着メロが彼女の思考を切り裂いた。はじかれたように画面に目をやると学校の二文字。

「……」

呆然とする雪音を尻目に画面は留守電に切り替わる。息を飲み込んで彼女が耳を当てると、

「神代さん……進路課の田中です」

男の声が聞こえてきた。

うんざりして雪音は携帯を枕で隠す。当たり障りない「学校に來てもいいんじゃないかな」というメッセージが容易に想像出来たからだ。

「（せいぜい査定でも気にしてる、税金泥棒、ハゲ、脂、奥さん不倫！）」

一通りの罵倒を思い浮かべると大きくため息をつく雪音。興奮してすっかり目が覚めてしまったのだ。ハゲのせいで眠るタイミングすら逸した……彼女は制裁をそのうち加える決意を頭の片隅にいれて布団から抜け出す。

「暇になっちゃったな……」

気晴らしに学校に行くなり就活するなりと心のどこかにツッコミが入る。勝手に聞こえてきた自分の声を無視すると、彼女は立ち上がり段ボールを手にした。

「……仕方ない……仕事しよ……」

雪音はミシンのカバーを外し、布団の上に正座する。

脇に置かれた段ボールには『援助物資』と後輩の夏代の丸文字が書かれていて、薄っぺらい漫画の束、その漫画キャラのラフスケッチ、そして小さなメモが入っていた。

「制作報酬五千円とオークションの四割、フリーサイズ」

メモを流し読みすると、作りかけのエプロンドレス（夏代的にはメイド服）を取り出して、雪音は慣れた手つきでチクチクとレース装飾を縫い付け始めた。

「ある程度フリーサイズで作ってくれて言われてもね…」

目の前で広げて全体のバランスを確認する。夏代の仲間内でオークションに出し収益の一部が手元に戻るということもあって、雪音の目は真剣だ。

ここまで来れば何をしているかは説明するまでもないが、もちろんコスプレ衣装作りである。

彼女の貧乏生活から覚えた裁縫が自然と普段着作りに発展し、少女趣味なコスプレ衣装作りと進化していったただけなのだが

「むふっ」

雪音の口からは思わず息が漏れてしまっていた。

作業のほとんどは終わっている。生地型の抜きは終わっているの後は全体をミシンにかけて、服の形を作るだけ。

「うん、いい感じ」

笑顔でミシンの動きを確認すると、深呼吸して集中力を高めてから彼女はなめらかに手を動かし始める。先ほどの死んだ目が嘘のようである。

最初は「作るのが好き、着るのは苦手」と言い聞かせ衣装を作っていた雪音だが、鏡に映る自分の姿に乙女心が燦られハマった趣味である。目が輝くのは当然と言える。

彼女にとって鬱屈した家のゴタゴタを忘れるのには最高だったのだろう。

もちろん表沙汰にしたところで…好奇の目にさらされることもある趣味とも自覚していたので、中学時代はバレないよう家の中で一人で悦に浸るようにしていた。一人で妄想に耽る分には許されると言うわけだ。

しかしある日、金に困ってコスプレ衣装をオークションに出品してしまったのがまずかった。その経由で件の後輩夏代に懐かれてしまったのは雪音にとって痛い過去になっている。

この夏代、いわゆる『腐女子』という人物で、雪音のコスプレ姿を勝手にホームページにさらしたり、騙してメイド喫茶のバイト面

接に連れて行かれたりと 趣味を表には出たくない彼女とは真逆の人物だったのだ。

数多くの鉄拳制裁と、知り合っていく過程で知った雪音の家庭事情への理解の結果、今はいい趣味友達として付き合いが続いている。

「（いい金づるだしね）」

何気ない趣味が金になるということで雪音は決して手は抜いていなかった。生活その他にやる気があるうとなかろうと、金に関してはシビアなのである。

さておき 雪音はミシンを止め仕上がりを確認すると「試着試着」と小躍りしながら部屋着を脱ぎ始めた。

衣装の丈は身長165cmの自分に合わせてあり、腰周りはベルトを締めて調整出来るよう緩く作ってある。何とかフリーサイズ要件は満たしているだろうと雪音は考えていた。

人より大きいらしい胸のせいで、上半身が詰め付けられるのが少しつらいが、試着のために矯正ブラを用意しているので服には問題ない。

> i 3 0 5 6 7 — 2 3 2 4 <

「うん… やっぱ、いいなあ… こういうの」

表情が自然と緩んでいく。続いて彼女はベルトをしっかりと締めると、鏡の前でくるとターンして見せた。

「へへ」

小道具の眼鏡をかけるとより雰囲気が出てくる。彼女は普段は赤いセル眼鏡をかけていたが、こういう時のために安く作った丸眼鏡を用意していたのだ。

次いで、半年前に衝動的に髪をショートカットにした後に買ったウィッグを装着する。

「… いい、絶対私かわいい、最高！」

それから小一時間、雪音は悦に浸ったまま鏡の前で過ごしていた。

夏代に引きずられ自分も『腐』の入り口に片足を突っ込んでるところには、当の本人は気付いていないようだ。

新聞勧誘が引きつったまま立ち去ると、雪音はガクリと膝から落ちた。

「…何でこの格好のまま玄関開けるのよ、私は、私は」

メイド服のままガリガリと雪音は畳をむしっていた。テンションが上がっただけ反動は大きい。自分が哀れで血の涙が出てくるようだった。

「全部：夏代のせいだ」

逆恨みとしかいえない愚痴をつぶやくと、彼女は携帯から素早くお気に入りのページを開く。

「（とりあえず夏代のブログ炎上させよう）」

一学年下の後輩は授業中なので、対処は出来ない。携帯アプリ経由で捨てメアドを開き、出会い系サイトにそのブログを登録しアカウト削除

光回線を入れる電話線もなければ金もないので、彼女にとって服を作る時間以外はこういったことぐらいしか娯楽がないのだ。

念のためブログの方のコメント欄にはテンプレートのチェーンメール風の書き込みしておく。

「うん」

十分満足したので、雪音はレトルトカレーを昼ごはんとして食べることにした。

「あんたが犯人か」

三十分後、電話から金切り声が響いてきた。

「むしゃくしゃしてやったから、反省はしない」

お茶をすすりながら人ごとのようにのたまう雪音。

「そんなことする暇だったら引きこもってないで免許でも取りに行

「だったらいいんじゃないですか？」

人の気にしてることを堂々と言う奴だ

冷たい後輩の指摘に雪音の眉は釣り上がった。

「就活めんどい、うちにパソコンあるから遊びに来て」

「素直に回線貸してと言ってくださいよ」

それから一通りの説教が終わった後、電話がブツリと切れた。時間切れらしい。

「（後輩のくせに生意気な… だいたい高校生がスマホなんて宝の持ち腐れよ）」

とりあえず雪音は横になってふて寝を決め込んだ。

日も落ちようかという時間になる頃、学校が終わり夏代が制服姿のままやって来る。

「密室殺人現場ですか、ここは」

布団をかぶったまま寝ている雪音の姿に死体かと呆れている。

寒いからとブツブツ言い訳しつつ雪音は裁縫を再開した。

あまりの雪音の暗さに会話は続かない。とりあえずWi - fiルータ経由で雪音の古いノートパソコンでは、自動ダウンロードが薄っぺらい本のデータを受信し続けている。

その光景は、やはり客観的に見て「ダメ」の入り口だった。

「僕としてはこれ以上は責任取りたくないな」

白衣姿の男はくると雪音に背を向けて看護師にカルテを渡す。

渡された側はその時出されたサインを見逃さず診察室から退出した。

「…先生…それはどういう意味でしょうか」

診察室に医者と二人つきりになると、雪音は少し緊張した。深刻な告知が待っているような空気になったからだ。

「うん、雪音ちゃんの様子を見てるとね… 内科の領域じゃなくて、やっぱり今度も専門の先生にお願いした方がいいと思うんだ」

雪音は医者と目を合わせることが出来なかった。ふつつつとわき

上がるいらだちを、何とか押さえているのだ。

「専門の先生つて精神科ですか…」

「まあ、心療内科でも精神科でもいいんだけどさ…考えてよ」

医者は雪音から聞き取った最近の様子を並べていく。

「生活面では外に出たくないし学校に行きたくない。寝れないから父親の薬箱から睡眠導入剤を引つ張り出して飲んでいる。

その薬が少し強くて朝に起きれないから昼間まで寝ている。そして夜に眠れない。趣味にしてもやる気が出ない、つまらない……まだあるけどね」

カルテに書けない裏カルテとでも言うべきルーズリーフから医者は症状を一つ一つ言い聞かせる。

雪音は俯いたまま言葉はなかった。

「肉親に先立たれると、一時的に鬱状態になることは多いからね」

「冗談はよしてください、父のせいで私が心を病んだとでも言いたいんですか!？」

子供の頃から雪音を診ている医者は、めったに見せない彼女の激高した姿に引きつってしまった。

「…まあ……そんな風に見えたただだから、落ち着いて」

「一時的に気持ちが高ぶってるだけです。内科の先生が眠れない患者が寝れるような薬を出してくれば解決でいいでしょ」

「雪音ちゃん…その強情さで前の彼氏と……真琴君だったっけ…別れたの忘れちゃいけないよ」

医者の言葉に雪音の拳が握られた。やや医者は椅子を雪音から遠ざけると、

「とりあえず、前紹介した先生は雪音ちゃんが逃げちゃったこと全然怒ってないから、考えるだけでも考えることだね

薬は出してあげるけどそれが条件、いいかな」

事務的な口調で淡々と伝える。

「わかりました」

何かに堪えるような症状のまま診察室を出て受付に行くと、薬と

会計は既に用意されていた。処方制限一杯の睡眠導入剤を奪うように手にすると、会計を終え雪音はクリニックの外に出た。

細い建物の階段降りながら雪音は怒りにうち震えていた。別れたの件がしやくに障ったのだ。

「あの藪医者、余計なお世話よ！」

雪音は足下に落ちていた空き缶を蹴る。

しばらくあの医者と顔を合わせなくてもいいよう、薬を節約するための計画を考えながら、彼女はドスンと力強く階段を駆け下りていった。

（第2話 終）

02・『現実から逃げた。布団は温かい』（後書き）

閑話休題2

夏代「これで第2話終了ですが……なんか荒れてますね」

雪音「うつさい」

夏代「それに腐り始めてませんか」

雪音「『夏休みと冬休みは戦争なんです』のあんたに言われたくない」

夏代「もう、先輩も恥ずかしがらないで楽しめばいいのに……怖くないですよお台場は」

雪音「……あんまりあれにはまりすぎると、取り返しがつかなくなる予感があるのよ……父の友人の構成から考えて」

夏代「はあ……大変ですね」

雪音「しかし……病んでるわね」

夏代「完璧に引きこもり生活ですね」

雪音「しかも次話じゃ……高校卒業しちゃうから」

夏代「ノン就業・修学・職業訓練ですね」

雪音「素直にニートと言いなさい」

夏代「次話の先輩はさらにシビアになります」

雪音「ちよつと……こっちはマジで辛いんだから」

夏代「ふえ……また叩かれた」

雪音「とりあえず私はさらにシビアになるそうです……そんな次話紹介もなんですが……よろしかったらお楽しみください」

03・『外に出た。日差しが辛い』

卒業式の翌日も雪音は昼まで寝ていた。日曜日だから文句はないはずである。

「もう…先輩、メール送ったんだから反応してくださいよ」

文句ないはずと二回つぶやいたものの、電話口の後輩はまっとうな生活をしているようだ…雪音はガクリとうなだれた。

「聞いてますか、日曜日は私も休みだから出かけるって送りましたよね？」

「（メールねえ…）」

着信中なのでメール画面は確認出来ないが、昨夜意識がはつきりしていた時にそんな約束をしたことを思い出す。細かい打ち合わせはしてない。

とっさに雪音は、

「なんかめんどいから、パス」

と答えた。

「……」

電話から返答は戻ってこない。彼女は恐る恐る「夏代？」と聞き返すと、不穏なため息が電話越しに流れてくる。

「…あほなこと言ってるで、今すぐ駅前に来てくれますよね？」

「あの…」

「来るんですよ？」

雪音は少し息を飲みながら肯定するしか出来なかった。

「じゃあ、三十分後でもいいですね」

雪音の回答を待たず電話は切られた。

やれやれと重い腰を上げて布団から起き上がると、彼女は仕方なく出かける支度を始める。

なんか最近夏代には怒られてばかりだなと思いつつ、手櫛で寝

癖を直していく。

「（私…そんなに駄目に見えるのかな）」

後輩が少しでも気分を変えようとしてくれるのは雪音も理解している。それはありがたいのだが…必ずしも外に出て気が晴れるわけでない。

ついでに言うとか駄目でないかに関してはコスプレ衣装のまま布団で寝ているの時点で確定している

雪音はナース服を脱いでラフな格好で外へ出る。ここは定番の部屋着ジャージでも着ていこうかと思ったが、たぶん怒られるのでやめておくにした。

「つと…」

久しぶりに浴びる日差しに、雪音は目をしかめた。

「（…だいたい…余計なお節介よね）」

卒業パーティーに誘われなかったので、せめて後輩としてファーストフードパーティーを開催すると張り切る夏代。

まるで同い年に友達いないことを哀れまれてるようで雪音は少し不快な気分になった。

どうせ趣味仲間とはこれから友達付き合いするんだし…クラスで浮くのは慣れてるし…そもそも…あんな親がいて普通の友達付き合い合いなんて…

何かに反応して口元がぴくりと歪む。

「……なんか…やだな…」

頭の中から否定的な言葉がどんどん沸いてくる。彼女は軽く首を振り、大きく息を吸った。

慣れない街は歩きにくい。駅に向かう道もおぼろげで、勘を頼りに進むしかなかった。

「駅って…」

細い路地を抜けると四車線の大きな道路に当たった。横断歩道を

渡り商店街を抜ければ待ち合わせ場所に着くはずである。

信号待ちの間、雪音は自分の呼吸を整えるのに精一杯だった。少し耳鳴りが聞こえてくる。

「大丈夫……大丈夫だから」

誰に聞かせるでもなくつぶやく　と、不意にぐらりと足下の力が抜ける。慌てて膝を押さえると、信号が変わったことを確認して歩き出した。

彼女を追い抜くように子供達が走っていく。

「そっか、日曜日か……」

自分の曜日の感覚のなさに、いらだってきた。

何とか商店街を抜けると、今度は踏切に突き当たる。リズムカルにカンカンと音を鳴らす踏切に捕まってしまった。踏切を抜けると駅、踏切を抜けると駅。

次第に雪音の思考はおかしくなっていく。時計を見ると待ち合わせの時間に少し遅れ気味だった。ごめんとメールを打ちたくて携帯を探すと　家に置いてきてしまったようだ。

「（落ち着こう、私は踏切の前に立ってるだけで危険はない。いきなり私の気がおかしくなってしまうこともない）」

駅から発車した電車がゆっくりと近づいてくる。雪音の心拍数がどんどん上がっていく。かなり意識していないと今すぐ倒れてしまいそうない力が抜けていた。

雪音の様子に周りの人がちらちらと視線を送ってくる。

と、電車の方からは警笛が鳴らさた。踏切の前でふらつく彼女に對してだろうか

「あ……」

警笛の音が鳴り響いた瞬間、雪音は尻餅をついて倒れてしまった。「どうしたのお姉ちゃん？」

先ほど彼女を横断歩道で抜き去った子供と目線が会う。踏切の先頭の車からは様子を見ていて心配になった男の運転手が降りて雪音の周りを囲んだ。

「……あ」

雪音は何とか説明しようと声を出そうとしたのだが、喉元が何かに締め付けられているように苦しく声が出ない。

時代に周囲は騒然としてきた。

踏切が変わると同時に後ろの方の車からクラクションが鳴られる。

「おら、前進めよ!!」

少し気の立つた中年が窓から身を乗り出し前の車の運転手を罵った。

雪音にその声が届くと、ずっと血の毛が引いていく。再び全身から力が抜け、雪音は道路に倒れ込んでしまった。

「ちょ……お姉……ん？」

「大丈夫……ねえ……救急……呼ん……」

遠くから彼女を心配する声が聞こえてくる。

雪音は短距離走をした後のように呼吸が乱れ、額からは冷や汗がにじみ出ていた。なんか苦しいのか胸元と首に手を当てて地べたに転がってるにもかかわらず苦しんでいた。

「救急車呼ぶからいいね、すぐ来るから頑張つて」

車を路肩に寄せて戻ってきた男が雪音の耳元でささやく。

雪音はそのことはその言葉に何とか反応して、男の持つ携帯を手で抑えた。

「……め」

もはや声にならない声だが、何とか意図は伝わったようで男が怪訝な表情を浮かべる。

「救急車呼ぶなって……」

目の前で少女が苦しそうにもがいているが、病院には行きたくないという

周りに集まる人間は雪音に対して、どうしたらよいかわからなくなってしまうた。

雪音は雪音で、そんな周りの様子とは関係なく頭の中の声と戦っている。

苦しい、死んじゃう、怖い、怖い、息が出来ない、怖い！

頭の中に弱い電気を当てられたような不快感が走る。喉元からは押し殺してきた息が漏れ出すようにうなり声上がる。

と、涙が止まらなくなり雪音は顔を手のひらで覆い隠した。

涙はすぐに嗚咽に変わっていく。ますます周りは途方に暮れてしまった。

「先輩」

人垣を分けるように夏代が雪音の前にしゃがみ込む。雪音は必死に事情を説明しようと口をぱくぱくと開けた。

夏代は小さく頷くと、「財布持ってます？」と短く端々とした口調で聞いた。

そうだ 昔もらった薬…財布の中にまだある…

雪音は目を大きく見開いて、ぎこちない動作ではあるが財布をポケットから引き抜く。

夏代は雪音から財布を受け取り、小銭入れから小さな薬を一錠取り出した。

「少し移動しますね」

慣れた手つきで雪音を踏切から遠ざけると、夏代は薬を雪音の手のひらに手渡し、自分のバックから取り出したお茶のペットボトルも反対の手に握らせる。

「ちよつと、あそこの人たちに話してきますから…」

雪音は小さく頷くと震える手を何とか押さえ錠剤を口に押し込んだ。

後ろの様子を見て一安心すると夏代は雪音の財布から手作りのカードを探す。先輩の彼女と友達になった後、夏代はこういうことがあるかもしれないからと説明を受けていたのだ。

「ご心配をおかけしました…詳しくはこのカードに書いてある通りですが」

集まっていた人は夏代が掲げたカードの文章を興味深そうに読み始める。

そのカードには手書きでこう書いていた。

『 -お願い- 私は、突如として「恐怖心」と「不安感」が襲ってくる「パニック障害」という病気の患者です。

ぜんそくと同じように、発作が治まれば、もとどおりになる病気です。十五分位で発作は治まります。

薬も持っていますので、誰もいない所まで、お手をお貸しく下さい。

医者も救急車も、必要ありませんので、誰も呼ばないでください。大変ご迷惑をおかけしますが、よろしく願います』

それは夏代が念のために雪音に持たせていたもので、ネットで探してきた文章を雪音が気軽に持てるように手書きしたものだ。

「ということなので、友達の私が介抱します……お騒がせしました」
まだ嗚咽が止まらない雪音に変わり彼女が集まった人たちに頭をぺこりと下げる。

納得したような、感心したような、あるいは怪訝そうな表情を浮かべつつ、とりあえず人の輪は解散していった。

周りが少し静かになると雪音の症状は少し落ち着いてきた。

「先輩、ちよつと動けますか」

「……」

「すぐその居酒屋に知り合いが勤めてます……事情を説明すれば開店前だし横になって落ち着けますよ」

その言葉に雪音は小さく頷く。夏代は雪音の脇を抱え、ゆっくりと立ち上がらせる。少しふらふらしているが、何とか歩けそうである。

「ごめん……」

「いいですよ、先輩はそういう病気なんだから……気にしないでください」

夏代は声に極力感情を入れないよう気を遣いながら答えた。気遣われてることに否定的になられてまた倒れられても困る……

雪音の背中をさすりあやすように並んで、二人は近くの居酒屋へ

向
か
つ
た。
（第3話 終）

03・『外に出た。日差しが辛い』（後書き）

閑話休題3

夏代「うぁ…」

雪音「何、その反応」

夏代「いや…また一気に急に重くなりましたね…」

雪音「そういう病気だし」

夏代「そういうもんなんですか」

雪音「そういうもんなんだけど…それがしっかり描写出来たかは自信がなかったりする、と」

夏代「はぁ」

雪音「こういう病気に関する微妙な表現ってのはお叱り受けるかもしれないませんが…お気付の点がありましたらご指摘ください。このあたるともしばらく私の病んだ描写が続きます…」

夏代「…ということで次回もお付き合いいただければ幸いです、はい」

04・『発作の代償。財布が軽い』

夏代は雪音を畳の上に寝かせると、彼女のブラウスのボタンを緩めた。

「一人で大丈夫ですね…私は厨房にいるんで、落ち着いたら教えてください」

そう耳元でささやくと、夏代は店の電気を暗くした。雪音はようやく静かになった店内で目を閉じ体を楽にする。

視界から雑多な景色が消え、少しだが恐怖が収まってきた。

久々に起きた発作…ここ最近の不摂生のツケ　彼女は己の行動に少しだけ後悔した。

「（しかし…夏代も手慣れてるわね…）」

自分でも忘れていた薬と対処カードをすぐ取り出して、その場を丸く収めて休憩場所まで用意する。なかなか出来ることではない。

「…ああ」

雪音は夏代の進路志望が看護学校とか言っていたことを思い出した。

ナース服がかっこいいからと笑っていたが、意外にそういう知識にも長けていたらしい。

診断名「不安神経症・パニック障害」の友人に求められるほぼ完璧な行動である…

「まいったな…」

雪音は虚脱状態で動けない体を何とかよじり楽な姿勢に変える。

この病気はカフェインの取りすぎや睡眠不足など、生活の乱れで発作が誘発されやすい。突如として呼吸や脈拍が乱れ強烈な不安感にさいなまれる　そういう脳の病気らしい。

中学卒業前に発症し、二年以上原因もわからず、ただ時々起こる

発作に耐えていた雪音。その間に多くの友人を失った。ようやく教えてもらった病院で対処法などを詳しく説明され、薬で発作を抑えられることを知ってから症状は安定している。

その病気になって初めて知ったが、意外と発症する人は多いらしい。雪音としては「精神安定剤」という言葉の響きだけ嫌悪していたが、発作を抑えられるので仕方がないと思っていた。

「（やつぱり 先生のところ行かなきゃまずいかな）」

最近は何も症状が出なくなったので、久々に発作が起きて薬のことを忘れていた。

カウンセリングで父親との生活がストレスで症状を悪化させてると言われ、その先生と大喧嘩して以来、勝手に病院に行かなくなっていたのだが…結果はこの通りである。

上半身だけを起こすと貧血と酸欠で頭がくらくらとする。ついでに薬が効いてきた時の独特の感触

少し頭が膜に覆われたような違和感に、雪音はぐるりと首を回した。

時計を見ると三十分は経過している。握り拳を作れるぐらい体に力が戻っていることを確認して、彼女はゆっくり起き上がった。

「夏代？」

厨房に向け声をかけると夏代は携帯をいじりながらコップから水を飲んでいた。雪音はそのコップをもらうと、軽く口に含んで粘ついて気持ち悪い唾液を無理矢理流し込む。次いで厨房にいた店員二人に一礼した。

事情は説明されているらしく二人は軽く目を合わせて「気にしないで」というジェスチャーだけを雪音に送り、何も言わなかった。「手を洗いたいんだけど……」

「あつちです」

夏代は客用トイレの方を指した。

雪音は洗面台だけ借りて、嫌な感情を振り払うように手を洗った。鏡の自分は涙の後が少し腫れぼったくなっているが、軽く施したフ

アндеが流れたりはしていない。これなら化粧は直さなくても良さそうである。

備え付けのペーパーで丁寧に周りを掃除をしてから外へ出た。

「って、何よこれ」

トイレを出た瞬間、雪音の目に奇妙な言葉が飛び込んできた。色紙の一部にニートの単語：

よく周りを見ると壁に掛けられた「今年の当店スタッフの目標」とタイトルを打たれた色紙だった。

「バイトを元手にFXでニート生活」

雪音は苦笑いした。受け狙いと思われるが、場違いにもほどがある、

そのシニールと言ってもいい目標に、急に気が軽くなって、頭の中のこんがらがった思考が薄れていく。

薬が本格的に効果的に効いてきた証拠でもあるが、その色紙のおかげでも、雪音はかなり正気に戻れた気になった。

二人はお店に丁寧に礼を言ってから、近くの喫茶店に移動した。せつかなので少しおしゃべりしていくことに決めたのだ。

雪音はこれ以上刺激物を取らないようにと烏龍茶を、夏代は紅茶とケーキを適当に注文した。

「……」

「すいません…無理に外出させたみたいで…その」

結果的に発作を誘発させた…と、夏代は気まずい思いをしている。雪音としては感謝することあれ、落ち込まれる云われはなかった。

自分が悪者になりそうだったので、彼女は泣きそうな夏代の頭を軽くなでる。

「そんなに気に病むことないよ」

「はあ」

「いや…その、借りたゲームやってたら寝れなくて…ここ一週間平

均睡眠時間三時間だから」

夏代は雪音の独白にフルフルと震えながらとうなだれた。

「アッパァー発でいいですか」

握り拳を作りながら冷たい声をはく夏代。

「ここの代金持つから勘弁してください…」

「…ガトーショコラ、追加で」

雪音が恐怖に負けておごりを提案すると、夏代はしたりと笑顔で店員を呼びつけた。

こいつ…かわいい顔して…雪音は呆れつつも自らもショートケーキを頼むことにした。

「あんたも自由な性格してるわね…」

「最近自由に生きてる先輩に言われたくありません」

そう言いながら嬉しそうにチョコを頬張る夏代。

雪音は深くため息をついた。反論するポイントが見つからない。

「こつちが散々苦勞してるのに、肌と髪もそんなに痛めちゃって…」

「光熱費がもつたいないからお風呂は三日に一回……」

「聞きたくない、聞きたくない…」

大事なことなので夏代は二回言った。あきれ果てたように、

「女としてやさぐれるの 早くないですか」

軽蔑の目線を送る。

「そこらへんは真琴にも怒られてるから勘弁して」

その目線をさらに冷たくなった。真琴とは雪音の元彼である。

「……まだ真琴先輩と会ってたんですか？」

「んと、月一ぐらいで家に来てるよ…一応友達だし」

加えて二日に一回はメールのやりとりをしていると雪音は教えた。風呂の回数より多い計算になる。

「……本当に別れたんですか」

答えにくい質問に雪音は口ごもった。そもそも父親の悪行と発作を理由に二人が別れたことを夏代は根に持っている。

冗談めかした口調だったが「先輩は胸がでかいから簡単に男と別れるんだ、貧乳差別だ！」と叫ばれた過去を雪音は頭痛ともに思い出した。

「…ご家族の問題が片付いたなら…別に再婚したって…」

「いつ結婚した」

お茶をすすりながら雪音はチョップを食らわせた。

「（しかし家族の問題が…っていうか金の問題だよな）」

大げさに痛がる後輩を無視して彼女は思考を広げる。

あいつん家金ないし、気質の家だし……

「（そっか、私が金稼げば付き合い直せるか）」

先ほどの短冊から雪音はどんどん妄想を広げていく。

宝くじ、競馬、競艇、FX ……一攫千金の手段はいろいろあるが、ハイリターンはハイリスクでもある。

「先輩？…ごめんなさい…気を悪くしましたか」

突然黙ってしまった雪音に、夏代は声のトーンを変えて様子をつかがっていた。

「いや、働かないで金稼ぐ方法はないか考えてた」

「ブルーマウンテン追加！」

夏代の怒りが雪音の財布にどんどん響いていた。自業自得である。

結局割り勘で事なきを得たが、不平等な会計に涙しつつ雪音は家路へと付いた。

途中送られてきたメールには「明日援助物資もって遊びに行きます」と書いてあったので、今日の埋め合わせがあるのだろう。

たとえ薄い漫画だろうと、娯楽の少ない雪音にはありがたかった。

「…ふう」

玄関を開けると、惰性で取った新聞が見事に溜まっていた。ネットがないところから情報を仕入れるしかないのだが、読むのは少しおっくうなのだ。

スーパーの特売をメモる習慣だけは、どれだけやる気なくても継続しているのが雪音にとって少し憂鬱である。

一八歳にとて悲しすぎるとブツブツ言いながら彼女は赤ペンを転がしていた。

「生活力あっていいんじゃない」

言い訳のようにため息を付くと、彼女は布団に寝転がった。

と、頭にこつりと何か当たった。枕元に置いたトートバックに入っていた本である。

夏代からのプレゼントと称したそれは、いわゆる『就活対策本』である。

雪音みたいに深刻な家庭の事情があれば、今からでも間に合うのではないかと、恐る恐る夏代が持ってきたものだ。

今日呼びつけられた本題はそれだったらしい

たまたま発作を起こして切り出しにくそうだったので、雪音は無理矢理それをもたらしてきた。

「（あいつの死は言い訳になるか……）」

薬のおかげで気分は好調である。こういう時ぐらい、少しは何かをしてもいいだろう

一瞬の躊躇を挟んだ後、彼女はため込んでいたチラシの山から求人広告をピックアップし始めた。

（第4話 終）

04・『発作の代償。財布が軽い』（後書き）

夏代「先輩が就活…」

雪音「泣くことか！」

夏代「お母さん、嬉しいです」

雪音「さらりと父子家庭の娘にそういうと言わない」

夏代「すいません…」

雪音「今回は一章の山場になります」

夏代「ついに雪音先輩があんなことに」

雪音「…夏代の出番もついでにあんなことに…」

夏代「いやああ」

雪音「…次回もお楽しみいただければ幸いです」

05・『手軽に就活。精神は辛い』

気が向いたら読んでみてと渡された本には『自分を魅せる就活PR（応用編）』とタイトルが打たれていた。

古本屋の100円ラベルをはがした跡はご愛敬とおこつ…それと、基本編どうした…訝しがりながら雪音は頁をペラペラとめくっていく。

参考例はオーソドックスに架空の人物の履歴書が左右の頁で良い例、悪い例に分かれて書いてあった。

とりあえずトートバックに入っていた白紙の履歴書を開封して、それを真似して書いてみることにした。

「神代雪音：一八歳：女：っ」と

彼女は簡単に書けるところから埋めていく。名前、年齢、住所、誕生日……

すらすら走っていたボールペンは難所に差しかかる。百文字書ければ上等なスペースに自己PRを書く欄である。

雪音は何か憂鬱な気分になった。

「…人の特徴を百文字で書ければ苦労しないわよね…」

並べておいてある参考書には『自分の長所を飾らず書こう！』とある。雪音は長所を考えてみた。

人様に言えないような経験と培った生活力、あつちの社会のおじさんと仲が良くて事情通、コスプレ衣装は人様に売れるぐらいの力量

「（駄目だ…）」

頭を抱える雪音。正直に書けば引かれる上に嘘臭さ満載である。

仕方なく無難に本を丸写しすることにした。

最後に学歴欄と職歴欄を埋める。

「高卒は…仕方ないとして…：職歴、新聞配達…：メイド喫茶…おじ

さんの事務所……もとい会社の事務とお茶くみ……やっぱり駄目すぎる」

完成した履歴書を眺めると、雪音は布団の上に置いたテーブルに突っ伏した。自分の人生が嘘みたいで、ため息も出てこない雪音であつた。

「なんか、無駄な努力な気がするなあ……」

とりあえず無難な履歴書は書けたものの、それを提出する先が見あたらない。

チラシに載るような求人では正社員応募は大卒からだし、高卒は商業高校で取れる資格がないと受付の条件にすら合わない……

卒業前に進路課の先生と喧嘩したのは痛かった　父親が死んで三ヶ月目にして少しだけ彼女は後悔する。

おじさんの紹介だとちよつといかがわしい仕事しか見つからないし、今さら学校に頼るわけにもいかない。残された道は職安だが、彼女はその場所すら知らなかった。

どんなところかわからないけど、行くだけ行ってみるか　疲れた頭でそんなことを考えながら雪音は大きく伸びをする。

「もう限界……寝る準備しよ……」

どちらかというと精神的な限界と言っても差し支えない。文章を考えることは気を遣うし、ましてそれが自分の将来に関わるとなれば一字一字の重みが積み重なっていく。

彼女は就活や履歴書作成というのは「拷問」に思えて仕方なかった。

「……」

時計をみると夜の一時を回っていた。日が変わる前には薬を眠りやがれと、夏代に釘刺されたことを先輩への言葉遣いに対する怒りとともに思い出す雪音。

その制裁は後で考えるとして　彼女はお気に入り猫のポイント

刺繍をあしらったパジャマに着替え、プラスチックのケースを開けた。

レンドルミンと書かれた錠剤は残り十錠。軽い睡眠薬で、彼女がいらいらして眠られない時に飲んでいる薬だ。正確には睡眠導入剤という。その日の体調によって割って半分にしてもいいとのことだ。次いで安定剤の在庫も確認する。パキシルが残り五錠。これは発作の時に飲めばいいので、ペースから考えればこれだけあれば十分……雪音はそう判断した。

医者の判断で処方される薬で、使い切ったら例の内科の先生が、喧嘩した精神科医にもらうしかない。

その問題は後回しにして、雪音は炭酸水と一緒に薬を流し込んだ。

「……仕事ってないものね……」

薬が効くまで三十分程度かかる。雪音はうつぶせになりながら、もう一度ぱらぱらと求人情報のチラシをめくっていく。

機械工、土木作業員、塗装工、印刷オペレータ……物作りの分野の求人様と多様と言える。一方、他の分野は「経験者」の壁が立ちただかっている。

「……ん」

スーパの特売チラシに挟まっていたB4サイズの一面チラシが雪音の目を引いた。紙面の三分の一がCとEの二文字で作られた口ゴで占められている。

「Clifford……Ent……クリフォード・エンタテイメント？」

聞いたことのない会社とシンプルかつスマートなデザインに少し興味を持つ。

内容を見ると「若手女社長と二十人の社員を抱えるイベント運営会社」「事業拡大のため趣味人、発想豊かな人、アキバ系など自由な人間を探してます」とのことである。

「イベント企画とかやるのかね……」

雪音は応募条件を見た。

「応募職種は社長秘書：事務および接客業経験者歓迎：月三十万：入社準備金として三百万円（一年勤続で返済義務なし）……なにこの最高の条件」

学歴も問わなければ資格もいらないう。

「こんなうまい話ね……」

少し頭がボーっとしてきた雪音はこの求人が楽しくなってきた。

「まずは、お問い合わせ先フリーダイヤル（二十四時間対応）まで……ね」

無防備な頭は、彼女の警戒心を取り払いそのまま携帯電話のボタンが押されていく。

「……」

電話を繋ぐと機械アナウンスで「しばらくお待ちください」と流れてきた。こんな時間にコールセンターが込んでいるとは

「よほど応募が多いのか……テープに切り替わるのか」

「はい、クリフォード求人部担当ルファと申します」

少し甲高い女の声が丁寧な雪音に名前を告げてくる。

「あ……あの……夜分すいません……チラシを見て興味を持って電話をかけてみたんですが……」

「いえ、こちらの時間では夕食前ですのでお気になさらず」

驚いた 海外に繋がつてるとは……

「チラシをこらんなったということは、会社にご興味いただけましたね」

「はい……主にその給与と待遇面と……私でも応募出来そうだと思います」

電話口から聞こえてくる声はとても穏やかで、なんか嘘ついてはいけない気分になってしまふ相手に思えてしまう。

いきなり待遇とかの話するのは就活で禁じ手のはずなのに、雪音はつられるようにそう答えてしまったのだ

「私にも応募出来そうとは、なにか創造的な趣味をお持ちですか」

「えっ……えっと……衣装のデザインと縫製を……」

「コスプレ衣装なんかも作りますか？」

少し回答に困ったが、アキバ系大歓迎の趣旨が求人にも書いてあった気がする。雪音は素直に「はい」と答えた。

しかし、会社説明会や応募方法を聞くつもりだったのに……これではいきなり電話で面接が始まっているようだ。

雪音は落ち着くために安定剤も一錠のみ、相手からの返事を待った。「当社では今、日本のオタク文化を利用したイベントを企画しています。それでそういった方と少しお話ししながら私に助言をいただける社長秘書を求人しているんです」

「……しゃ……社長でしたか」

冷や汗がどくどくと流れてきた。心臓がどくどくと早鐘を打っている自分の様子がわかるぐらい、雪音は動揺した。

「まだ二十歳の若輩です、気軽に話ください」

「い、いえ……とんでもないです」

いつの間にか姿勢を正座に変え固まる雪音。一方電話口からはくすくすと笑い声が聞こえてきた。

「大丈夫、あなたは一次面接合格ですから、おびえなくてもいいですよ」

「はい!？」

「私、人の声を聞けばだいたいその人の性格とかわかるんです。

あなたとは話しやすいしきつと一生懸命生きてきたんだあってわかる気がします」

「……」

雪音には何も答えられなかった。

「履歴書はチラシの下のQRコードを使って写真で送ってください。数日以内にこれからの選考と会社説明会についてご説明します」

「い……いいんですか、これで一次面接で」

「はい、日本企業のような面倒な選考は時間の無駄ですから……すみません、会議の時間が迫ってますので……またご連絡しますね」

「あっ……はい……お忙しい時間いただきましてありがとうございます」

した」

「you're welcome...では失礼します」

雪音は電話を持ったまま身動きがとれなかった。

せつかく飲んだ睡眠薬が効きにくい。今日は久々に発作起こして、しかも先ほどの電話で興奮してしまったのだから無理はない。

「履歴書：送るだけ送ろうか」

何錠目かもはや思い出せない睡眠薬を口に流し込むと、雪音は携帯力メラを使い履歴書をあの会社にメール転送する。

睡眠薬の影響で少し判断力が落ちた頭でも、これでもう寝なくてはならないことはわかっている。

雪音は電気を消して布団に潜り込んだ。

「...はは...なんか変なことになっちゃったな」

横になったとたん、冷静になった雪音は己を省みた。考えてみれば話が出来すぎている。個人情報収集が目的の詐欺か、父の友人のいたずらかもしれない...

雪音は衝動的に任せた行動を後悔する。気分任せに行動することは良くないと...父親を見て懲りてははずなのに...

「...なんかもう...いいや...ゆっくり寝たいな」

嫌な感情が雪音の頭にまとわりついてくる。だから自分はダメなんだとか、そんなことじゃこれから先また失敗するとか...自分の声で自分が自分を罵ってくる。

憂鬱な気分が激しくなると、決まって起こる症状である。

「う...っさい」

頭を抱えて雪音はプラスチックケースに手を伸ばした。

夢を見たくない、ひどい気分から解放されたい、そんな気持ちから残ってる薬の包装シートを破いて口に流し込む。

先ほど飲んだ分も含めれば、おそらく一週間分ぐらいまとめて飲んだ計算になるが、今の雪音にはよくわからなかった。

強烈な眠気と高揚した気分は不快そのものだが、意識は落ちてくれない。医者から処方された睡眠薬は安全に出来ていて、一週間分ぐらいでは過剰摂取したところで死ぬことはないという。

その知識は頭の片隅にあった雪音だが、次第に暗くなる天井に彼女は不安のどん底に陥った。

明日の朝夏代が来たら、私死んでるんだ……救急車呼ばれて……医者に面倒くさそうな顔されて、胃の中洗われて……みんなに後ろ指指されて……

こうなることわかってるのに……何でこんな事しちゃったのか……

自分でも制御出来ない妄想があふれ出し、こみ上げる吐き気をこらえながら彼女は布団をかぶる。

「もうヤダ……いなくなっちゃえ」

夢を見ることがなく、雪音はそのまま昏睡し続けた。

「……せん……い」

明かりの中、歪んだような声が響いてくる。焦点の合っていない目で雪音は体をむくりと起こすと、夏代が頬を叩かれていることに気付いた。

「……?」

口元には何となく酸っぱい感触が残っていて、体のたるさに雪音はふらりと倒れそうになる。夏代が半泣きの顔で何かを叫んでる様子を、雪音は呆然と見つめている。

「……ちゃんと薬飲んで寝てとは言ったけど、何ですかこれは!」

そう怒鳴られて、雪音はほっぺをつねられた。

「……痛いよ」

「生きてるから痛いんです、これ見てください」

夏代は枕元を指さした。昨夜の惨劇　散乱した薬と破れたシートの束、寝ている間に戻して散らした跡……

「……ああ……」

ようやく何で怒られているか、雪音は人ごとのように理解はした。

「…ちょっと飲み過ぎちゃったみたい」

おどけるよう雪音は舌を出したが、夏代の怒りをさらに買ったようだ。

冷たい目線が帰ってくる。

「とにかく、病院行きましょうね」

「いや…だ」

雪音の気のない返事に夏代は啞然とした。

「先輩…自分が何をしたか、わかってます？」

「…過剰摂取…OD…もどき…別にたいしたことじゃ」

「……」

夏代の口元が歪む。

「もし吐いたものがのどに詰まったら、先輩は死んでたんです。

不眠とパニック障害の発作点々ちよつといい加減…内科でごまかせる段階じゃないことは」

「だって…あそこのカウンセラ…家族と一緒に話したいっていうし……」

親権者とはお互い関わり合いにならないって念書…書かされたから…病院から連絡されると…」

「馬鹿なこと言わないでください！」

雪音は金切り声に、うるさいとばかりに耳を押さえる。

「もういいです、弁護士先生の番号教えてください。私、先輩のこ
と通報しますから」

このまま雪音と話していてもラチが開かないと、夏代は次の行動に移した。

「やめて…」

自分の携帯に伸びる後輩の手を、雪音は力なく遮った。

いきなり携帯を取られそうになり、雪音の意識が怒りによって徐々に覚醒してくる。

夏代は遮られた手をさらに伸ばし、無理矢理雪音を押し倒す。彼女もまた怒りによってムキになっていた。

「いい加減にして！」

つねられたお返しとばかりに雪音が夏代の頬を力一杯叩いた。

「夏代：心配してくれるのは嬉しいけど……いい加減にしてくれないかな」

口の動きが鈍く、ついでに頭もまだふらふらで、雪音は取り繕うことなく不満を口にする。

夏代はわなわなと震え言葉が出てこないようだ。

一度大きく深呼吸して夏代は雪音に目を合わせる。

「……先輩……おかしいですよ……心配したらいけないんですか」
はき出すように夏代が問いかける。

「これ以上私のことで心配してほしくないの。だから……もうかまわないで」

雪音は静かにつぶやくと、そのまま俯いた。

数秒間、重たい空気が二人の間に流れた後、

「……先輩達が別れた理由……ようやくわかりました」

夏代は冷たくそう言い放ち、すくりと立ち上がる。

「もういいです……そうやって一人で塞ぎこんでればいいじゃないですか！」

「……」

雪音は反論こそしなかったが、険しい表情で夏代をにらみ返していた。

「……もう知りません……自分がやったことわかんない人は……好きにしてください」

吐き捨てるようにつぶやくと、夏代はばたばたと出ていってしまった。

「……」

雪音は途方に暮れてしまった。少し混乱した頭でも、売り言葉と買い言葉の飛び交いあう言い争いが起きたことはわかる。

ところが薬の影響で意識のレベルが半分も起きていない雪音は、自分が何を言ったか整理が出来てなかった。

ただ原始的な感情　言われた言葉に対する怒りだけは心の大半を占めている。冷静な自分が心の中で自分も悪いかも、と言っていたが抑制はきかなかった。

「ああ、人の寝起きに好き放題言ってなによ！」

振り上げた拳の生贄として、手に持っていた携帯が壁に向かって投げられた。がつつと何かが割れる音が聞こえ、雪音はさらに激昂する。

「うるさい」

薬の入ったケースが流し台に当たってバラバラと落ちる。さらに雪音の近くの段ボールは手当たり次第叩かれていく。

「はぁ」

大きく方から息をしながら雪音は布団に座り込んだ。

一通り暴れをした後、とたんに虚しくなってしまったのだ。

昨夜、薬を自棄になって飲んだだけでなく、後輩と喧嘩して、自分分は物に八つ当たり

「馬鹿みたい……」

心拍数が落ち着いていた頃には、雪音の気分はどん底まで落ち込んでいた。

とりあえず彼女は普段着に着替え、財布だけポシエットに入れ出かける準備を始める。

普段は外に出たくないのだが、今はとりあえず家にいない方が気分が晴れると考えたからだ。

「……頭……冷やそう」

投げつけた携帯は画面が割れていたが、試しに時報にかけると繋がったのでそれも一応詰め込むことにした。

準備が出来、彼女は少し家の様子を眺めてみる。騒動のせいで無茶苦茶になっていた。

「……」

ふと、ここにもう帰ってこれないのではと、不安が脳裏をよぎる。
ここにいて発作が起きるよりは……雪音は自分に言い聞かせ家を
出た。

（第5話 終）

05・『手軽に就活 精神は辛い』（後書き）

閑話休題5

雪音「ということで5話終了です…夏代の出番もこれまでです」

夏代「…」

雪音「喧嘩別れで非常に辛いですが、次話からは新しいヒロインでお楽しみください」

夏代「……」

雪音「そもそも作者がキャラの一人回しが苦手なので、相方として登場させたキャラですから…」

夏代「……………」

雪音「なんか言いなさいよ、すごく私が悪人みたいじゃない」

夏代「（ニヤリ）」

雪音「それが狙いか、それが！」

夏代「うあゝん、先輩がいじめる、殴られた、恐喝された、財布取られたあ」

雪音「……黙らないと本当にやるわよ」

夏代「…はい」

雪音「夏代の出番は後半にもう一度あります。次話で第1章完…と、今回と同じく少し長い話になります。物語は舞台を徐々に移して進みますので、引き続きお付き合いいただければ幸いです」

06・『感傷旅行へ行こう。国際線だけど』

昔あった鉄女ブーム以前から、雪音は電車の旅が好きだった。

むしろ電車に長い時間乗ることが好きなのだ。別に鉄道フェチというわけではなく、何となく流れる景色を見て頭を空っぽにすることが彼女のストレス解消法なのである。

今日は家にいてはいけない日というのが月に何度かあって、時間つぶしに覚えた悲しい趣味でもある。

特定の区間を駅と路線が重ならないように大回りして隣の駅へ移動する、いわゆる大回り乗車。電車に揺られていると、当面の問題を忘れられるし漫画喫茶より安上がりだ。

今日の雪音にしてみれば体調は最悪で、まだ起きているか寝ているかよくわからないので……ホームで寝てても一緒だったが

「（弱い薬でよかった）」

雪音はしみじみと思う。冷静になった頭は、昨日の己の行為を猛省していた。なぜそんなことをしたかと言えば……死にたいとか、誰かに見せつけたいとか、そういう積極的な理由があるわけではない。たぶん死ぬことはないし、医者からもらえる薬で死のうと思ったら飲みきれない量を飲まないとは言われている。朦朧とした頭でもそれ知って飲んでるんだから、誰かにかまってほしかったのかと聞かれれば、雪音には否定するだけの材料はなかった。

それはある種の逃避であり、本質的に電車に揺られて車窓を眺めることと変わりはない。後輩に心配はかけたが、友達なのでノーカンである。

「……」

癖になると死んじゃうこともあるっていうし……一杯飲んで危険な薬もあるし……

一応雪音は常識的な否定文を頭の中に浮かべた。反省する気はあ

まりない。自傷行為の一つや二つ見逃してほしいものである。手首を切らないだけ、後に残らないからいいだろう

だらだらと浮かんでくる己の言葉に、憂鬱になってしまった

「（酒に溺れたあいつと一緒に）」

ぐらぐらと彼女の体が振動に合わせて揺れてる。電車は武蔵野線を通り埼玉から千葉へ入りつつある。

車窓には江戸川が広がっている。彼女の好きな田園風景が広がる地域までは、まだ少しかかるようだ。

ようやく目覚め始めた体が空腹を訴えかけてきた。考えてみれば雪音は昨日の昼から何も食べていなかった。

時計を見ると、三時のおやつにちょうどいい時間になっている。

ふらりと立ち寄った立ち食いソバ屋で山菜ソバをすすりながら、雪音は携帯を取り出した。公共モードを解除すると、滲んだ液晶画面に着信履歴のアイコンが浮かんでくる。

断片的に見えた番号に何となく覚えがあり、ほとんど反射的に彼女はコールバックをする。画面が割れただけで通話機能は問題ないようだが、ずいぶん長い発信音に雪音は少し不安になった。

「Ah・・・この番号は雪音さんですか？」

「あ…えつと……………社長さん？」

一度聞いたら忘れることの出来ない朗らかな声が電話口から響いてきた。雪音はその場で硬直し、声が出てこなくなってしまった。電話口からは穏やかな笑い声が聞こえてきて、「気にしないで」と軽く返される。

「ルファと申します、覚えてくださいね」

非難には聞こえない口調で、ようやく雪音はソバを挟んでいた箸を置くことが出来た。

「えつと…お電話いただいたようですが」

彼女はとりあえず気持ちを切り替え、就活モードに無理矢理入れ

る。

「そうでしたね、今からお会い出来ますかという要件だったんですが」

雪音は少し絶句した。昨日の今日でいきなり会いたいなんて

「今から…ちよつと家から遠くに外出してるので少し時間…かかりますが…」

生まれ持った警戒心から、雪音は何とかそれらしい理由で断り様子をつかがおうと試みる。

「あら…そのままでかまいませんよ、私服だろうと、コスプレ姿だろうと」

「でも…」

「あつ…私ったら気が利かなくて…もしかしてデート中でしたか」
悲しい気持ちで雪音はその言葉を否定する。外堀が埋められていくような感覚に、彼女の胃がきりきり痛み出した。

「ではかまいませんね。うちの社員は気軽に自由にながモットーですし、私はその…見た目は気にしませんから、あなたがどんなに恥ずかしいコスプレ姿でも大丈夫です」

「（私がコスプレ姿なのは前提なんだ）…でも…今からですか？」

雪音は日本人として出来る最大限の『行きたくないから察して！』口調で返事を保留する。

「交通費と食事代はこちらで持ちますので夕食を食べながら会社見学のつもりでいいじゃないですか」

あいにく、ルファさん 綺麗な日本語をしゃべるが時々話す英語の発音から見て欧米人 には通用しない。

雪音が答えないでいると向こうの攻撃はさらに続いていく。

「今はどちらにいますか」

「外房線の…蘇我ですけど…」

埼玉からぐるりと遠くへきたもんだ もはや敗北の色が濃い雪音はのび始めたソバを眺めていた。

「では、そこから出る特急に乗ってください。東京駅の八重洲口に

迎えの車を回します。よろしいですね」

強引な空気に流され、雪音は完全に断るタイミングを逸してしま
った。

「…わかりました…よろしくお願いします」

脂汗を流しながら、雪音は震える指先で電話を切る。

話が出来すぎていて、怪しさ全開なのに断れなかった……

「ふっ……」

やけくそのように彼女はソバを流し込む。途中むせ込みそうにな
ったが、店主の目が丸くなるのを無視して完食した。

「まあ…面白半分でやってやろっじゃないの」

変なことに巻き込まれた自分を鼓舞するように、雪音は一人つぶ
やく。

どうせ昨日死んでいたかもしれない身だ…少しは楽しもう 半
分自暴自棄のような気持ちで、雪音は京葉線のホームへ向かった。

雪音が東京駅の改札に近づくと「Ms・Yukine」と書かれ
たプラカードが目飛び込んできた。持っていたのは180cmは
ありそうな長身の…白人男性。

「ブラックスーツにサングラス…シュワちゃんみたいなの…がたいの
良さ……つつか本人？」

確かどこかで政治家をやっていたはずなので本人ではないだろう
が、少なくとも近寄りたくない人物ではある。

ところが、雪音が改札を抜けるとその黒服の男は彼女の方を向き、
大きく手を振ってきた。

「雪音様！」

写真で顔を知っていたのか……他人のふりが出来ないまま、雪音
はその男と握手する。

「クリフォード・エンタテイメントの社長秘書、アレンと申します」
丁寧にお辞儀をされ会社名告げられてしまった以上、ここで「さ

ようなら」というわけにも行かないよね」と、雪音は少し怖さを感じながら黒服が案内する方へと歩いて行った。

「社長より雪音様をお連れするよう言われましたので」

駅を出るとタクシー乗り場の一角にリムジンが止まっている。

「まさか…」

「はい、あちらの車で会社までお送りします」

混乱した頭に何とか落ち着くよう言い聞かせ、雪音は車の方へ向かった。

リムジンの運転手は二人が近づくとドアを開け、中へ案内する。有無を言わず乗り込めというジェスチャーでもある。

用意がよすぎて、こちらの突発的な行動にしっかり対応して、目まぐるしく巻き込んでくる上に、金がかかっている

「どうしました？」

雪音が車の前で躊躇していると、黒服の男は丁寧な手のひらを指し出し、雪音に車にお乗りくださいと促した。

その仕草は「それなら」の護衛の物腰を連想させ、雪音は少し震えながら後部座席にもたれかかる。

隣に黒服の人に座られ逃げることも出来なそう……

車は急発進し、首都高へと入った。

「……なんか」

雪音は昔、父が口ずさんでいた曲を思い出した。

確か泣いたことのない女が「こんなことされても」怖くなかったとかいう内容で、「速い車に乗っつけられても」という歌詞があった気がする。

「怖いことはないけど……泣いたことはたくさんあったなあ」

自分で言っていて古い話だな苦笑する雪音。

ぼんやり父親がらみの嫌がらせかいたずらか……

そんなことを考えながら思いながら窓の外を見る。車線変更したの道路標識には「羽田空港 10km」と書いてあった。

そういえば父が借金して人質に取られたのは…十歳の時以来か雪音は体が縮むような深いため息をついた。悲しい思春期だったと頭の中でモノローグが流れている。

若干の恐怖こそあるが、表面的に動転を見せていないことも、彼女の父にろくな友人がいない証拠でもあった。

車が空港前のエントランスに止まると、黒服の男が雪音に茶封筒を手渡してきた。

中を開けると彼女のパスポートと渡航書類の一式が入っている。

「……何で…」

あまりの手際の良さに、雪音はほとんど口を開くことが出来なかった。

「弁護士長の長田先生から鍵をお借りして…家から持ってきました」

「あの人もグルか！」

頭が痛くなってきた…

この話を信じるとすれば、この黒服の男が誰かが勝手に家に押し入ったことになる。友人や元彼ならまだしも、弁護士と名のつく職業の人間に泥棒の片棒を担がれるとは

「説明してくれるかな」

運転手が開けたドアを抜け車から降りると、彼女は冷たい視線を黒服に送った。

「後ほど説明いたします。とりあえずこちらに」

黒服に慇懃に頭を下げられ、雪音は渋々その後続いた。

案内されたのは国際線ターミナルの貴賓室である。彼女はテレビで政治家が座ったこと思い出した。パスポートを渡された時点で海外に行かされることはわかっていたが、リムジン、貴賓室とVIP待遇が続く彼女は現実感を失いつつある。

「話は簡単です。社長が雪音様とお会いしたいのでお連れしました」

「昨日の今日で……しかも周到な準備までして、とても採用活動と

は思えないんですけど」

座り心地の悪い柔らかいソファーにもたれ、雪音は不愉快な気持ちを隠さず伝える。

扉の向こうには警備員もいるし、狭い部屋に男女一人ずつというのは雪音には有利に働く。悲鳴一発で目の前の黒服などはどうにでもなるだろう。事情を説明すれば怪しいのはどちらかは、明確である。

「どこの国かもわからないんですけど」

「英国です。今はそれだけしか言えません」

「…警察…呼ぼうかしら」

もつとも全て打ち合わせ済みで、警官も警備員も抱き込まれている可能性は否定出来ないと雪音は思った。最善の策はとりあえず情報収集なのだが…なかなか黒服の口は堅い。

「お願いします雪音様を連れて行けないと私、社長に怒られます」

と、黒服は立ち上がると、スーツを脱ぎ捨てその場に正座をした。
「…」

啞然とする雪音を尻目に男は袖をまくり、カーペットの床に額を付け土下座を始める。

「この通りです、雪音様を騙していることは承知ですが…ここは社長の嘘に乗ってください、お願いします！」

「いや…あの……」

「ハラキリですか、私が腹切りすれば誠意を見せられますか!？」

男は……金髪白人は、大げさにミエを切り、上着を脱いだ。

「決して、雪音様を誑かそうとか、そういうわけではありません。

社長があなたにお会いしたいのは本当です。武士の、ブシノナサケヲ」

「もう、わかったわよ」

こめかみに走る鈍痛をこらえながら、雪音はうなだれた。ハラキリとか武士とか堂々と言う人間が、なぜ「誑かす」という言葉を知ってるのか…最後の片言の日本語はわざとか…突っ込みが追いつか

ない。

「ではこちらをお渡しします」

「（こいつ……ころりと態度……変えやがった……）」

何事もなかったように服装を正すと、男はスーツのポケットから携帯電話を取り出した。あれだけ男が騒いだのに警備員が来ないところを見ると……抵抗は無駄なようである。

渡されたのは国際電話対応の最新機種で、ご丁寧にも九時間遅れの時間　すなわち向こうの現地時間に合わせてある。

携帯壊したからちようどいいと思いつつ……わけはわからなかった。

雪音は電話のカードを差し替え、電話が正常に起動したことを確認した。

「……あの」

強引な説得に成功し、満足げに出国手続きを始める黒服に雪音は恐る恐る問いかけた。

「一本、電話していいかしら」

「手短にお願いします」

あからさまに腕時計を叩きながら、態度を露骨にする男。一度言質を取ったら好き放題　さっきの土下座は何なんだと、雪音はブツブツつぶやく。

文句を言っても仕方ないので、財布から緊急連絡番号のカードを取り出し、少し躊躇しながらボタンを押していった。書かれているのは医者と弁護士と……人のよい後輩の番号の三つ。

「（半日前にあんなこと……あつて何といえば……）」

「……先輩？」

「……」

電話越しに嫌な空気が流れ込んでくる。とりあえず謝罪だけでもしておこうと、雪音は大きく息を吸った。

「怒ってるところ悪いんだけど……今朝は私、言いすぎた……ごめん」
何か考え込むように回線の向こうでは息を飲む音が聞こえてくる。

「……その…わたしも…」

「これからちよつとイギリス行くことになったから、悪いけど家のゴミを出しといてくれるかな」

雪音は一気にまくし立てた。少なくとも嘘は一つもついていない。

「はい!？」

「私もよくわからないんだけど白人に腹切りされると目覚め悪いから、ちよつと出国します」

絶対私は嘘はついていない。自分に言い聞かせ雪音は続ける。黒服が身振りで貴賓室のドアと時計を指し示す。渡りに舟とばかりに、
「飛行機出るみたいだから切るね」

雪音は携帯を耳から離れた。

「ちよ」

最後に悲鳴のような声がかすかに聞こえ、電話の回線はぷつりと途切れた。

「（こりや…半年は口を聞いてくれないだろうな）」

苦笑いしながら雪音は携帯をジーンズのポケットにしまう。

貴賓室を抜け簡潔な入管手続きを終えると、出国エリアからは再び送迎の車に乗せられた。

「…まさかと思うけど…」

空港の運転手は無線を駆使して、大きな飛行機をすり抜けるように誘導路を飛ばす。

滑走路と平行して走る車は、やがて飛行機の駐機エリアに入った。そこにはプライベートジェットが一機、タラップを据え付け待機している。

「まさかあのガルフストリームじゃないよね…」

昔図書館の図鑑で見たことのある飛行機である。沖止めの駐機エリアにはそれしかない。

「お気に召しませんか？」

雪音はぐるりと首を回した。これはきつと夢だと現実逃避しようにも……飛行機のエンジン音が容赦なく彼女をたたきつけてくる。

「門に書かれていたのは…労働は人間を自由にする…だっけ？」

車を降り、雪音は飛行機の小さなタラップに足をかけながら皮肉めいて黒服に問いかけた。

「それはナチがアウシュビッツの門に書いた標語です。私は英国人ということをお忘れですか？」

たいした皮肉にはなっていないようだ、雪音は観念した。さすがに、こういうネタには反応が早いものである。

「今からやっぱキャンセルってなしよね」

「ご冗談を」

男は軽くあしらった。

海外に連れて行かれる時は、父親がらみで臓器でも売る時と覚悟していたが

借金がらみでこんなに金をかけることはない。雪音はこういうものの相場は知らないが、ジェット機をチャーターするだけで家が建てられるぐらいの金がかかることはわかる。

あのルフアって子……社長とやらの言うことを信じるしかない。

「……」

なぜかわからないが、あの声が信用出来るのだから……やっぱり昨日の薬の影響で本調子じゃない

雪音は覚悟を決めて飛行機に乗り込んだ。

（第5話 終）

06・『感傷旅行へ行こう。国際線だけど』（後書き）

夏代「先輩どうなるかと思ったら、このコーナーの共演が真琴先輩って、どういことなんですか」

真琴「いや、雪がいろいろしゃべるとネタバレになるし……」

夏代「1話で家具を運んでただけで一言もしゃべらなかった人がしゃべってる……」

真琴「……これから先出番のない人がしゃべってる」

夏代「……」

真琴「……」

夏代「とりあえず二人って別れたんですか」

真琴「よくわからない……いきなりメールで『ちよつと自分のことが忙しくなりそうだから別れるけど、これからも友達でいようね』って送られてきて……」

夏代「あの女……」

真琴「次の日も普通に話したし、頻度は減ったけどデートはするし……」

夏代「さっきの電話と一緒にか！」

真琴「……自由だね」

夏代「（ため息）」

真琴「これで第一章『ニート編』は終了だそうです」

夏代「次回から『イギリス編』らしいですが……真琴先輩、お金貯めて二人で行きましょう」

真琴「お金あったらなあ……雪のことと助けられたのに……」

夏代「（やべ…地雷ふんだ）……ということまで1章までお読みいただきありがとうございます。構想上ここまで4話でやる予定だったんですが……作者想定の記事量より肥大中です。別にプロットを変えているわけでもなく、ラストまで決まってるので作者が病気でもならない限り続きます。ちよつと不安定な雪音先輩が、これから先安

息を得られるのか、突然現れた謎の女社長の正体は…とか含めて2章以降もよろしく願います。」

07・『異国の地。観光名所と父の形見』

「…うう」

小刻みに揺れる機内で雪音は喉の渇きに耐えていた。昨日の件もあるのです、彼女は薬を飲めず胃のむかつきに苦しんでいる。

日本を出てから三時間、水平飛行に移った直後に乱気流に遭遇して一時間、今は席を立てずトイレにも行けない。

当面、機上で衛星経由でNHKを見ながら時間をつぶすしかなかった。

五時間後にモスクワにて、給油のための着陸があるらしいが…今は逃げだそうにも高度一万メートル上空である。

「（まあ…逃げる気はないけど…どうせ外は『おそロシア』だし…）」

「パスポートは黒服が持っている上に、雪音の脳内ではロシアは外国人犯罪者は射殺される国になっている。

その黒服こと、偽シユワちゃんことアレンは、日本文化の勉強と称して眉をつり上げながら漫画を読んでいた。

しかも雪音のアパートにあった同人誌…BL系…である。

「（つつこむだけ野暮）」

目の前の光景を黙殺して雪音は腕時計を見た。日本では夜九時のニュースの時間である。

少し耳を慣らしておかないと 雪音は座席のリモコンを使ってテレビの音声を英語放送へ切り替えた。

「…そんな訛った英語を聞かせないでください」

雪音が振り向くと不快そうに黒服が耳を塞いでいた。苦情の内容を詳しく聞くと「汚いアメリカ訛りは嫌い」とのことである。

「…これが訛ってるなら私はどうなのよ」

「アジア人の英語は英語ではないですから」

「……あつそ」

機内では勉強となるべく英語で話しかけてた雪音だが、気持ちが萎えてしまった。

私に言わせれば外国人の日本語だってインチキ　そう言い返したかったが、狭い機内で文化対立しても仕方がない。

彼女は冷たい目線だけ送ると、再びリモコンでBBCに切り替える。映ったのはスポーツ番組で、昨日のF1のダイジェストをやっていた。

黒服の言う「きれいな英語」とやらを聞くが雪音にはその違いをわからない。

四角い顔の人がレースについてしゃべっているが、技術用語ばかりなので余計に理解が難しかった。

「デヴィット…コル…クル…」

字幕に出ていた解説者の名前を読みあぐねていると黒服が笑いながら、

「クルサードです。先生を知らないとはこの『非国民』めが！」

日本語で教えてくれた。どこでそんな日本語を覚えるのだろうと雪音は不思議がる。

この後機内では、黒服が日本語で、雪音は英語でしゃべり続け、時間をつぶしていった。

給油を終え次こそヒースロー空港へ向かうと雪音が意気込んだところ、試運転されていた飛行機のエンジンが止まってしまった。

「何？」

雪音がパイロットに聞くと、出発は六時間後だという。

「…天気でも悪いの？」

「モスクワをそのまま出発すると社長がまだ寝てるので、時差調整のための待機をします」

あっけなく黒服は言うが、だからといってこっちが駐機場で寝る

のは理不尽

「（まあいいや）…」

反論する気力も失い彼女は簡易ベットに寝転がる。

後輩にメールで簡単な事情説明と、たまってるであろう新聞整理を一方的に依頼すると、雪音は意識を失うように眠り込んだ。

結局雪音が寝ている間に飛行機が発し、日本を出て十八時間ようやくロンドンに到着した。

出発地の日本では翌日の昼だが、こちらは早朝である。腕時計と携帯の二つの時間に雪音の日付の感覚はおかしくなってしまった。

入国手続きは買収されているかのように簡潔で、わずか五分で終了した。唯一雪音が困ったのは『滞在目的』で…まさか「拉致です」とは言えず、彼女は無難に「観光」と答えることにした。

「嘘ではないですよ、市内を回る時間がありますから」

「どうせ社長が朝ご飯食べてからとか言うんでしょ？」

「驚いた…サイコネリストですか、あなたは」

ツッコミは無粋である。日本人として

二人がターミナルを抜けると運転手が待機していた。わざわざロンドンらしく黒タクシーが用意され、車で市内を回る。

ビックベン、ウィンザー宮殿、ロンドン橋…：少なくとも霧のかかる早朝六時に見ても楽しいものではない。

雪音はため息をつきながらそんな景色を眺めていた。父から将来困った時に海外逃亡出来るからと英語は一応叩きこまれたが、空港でもタクシーでも結構通じている。

「（そういえばあいつが英語しゃべれた理由って…）」

海外で悪事か…

「イギリスで何をやらかしたんだか…あの親父」

頭を抱えていると、車は観光向けのコース抜け、ロンドン中心部から離れていく。

雪音は段々不安になってきた。本題を思い出したからである。わざわざ飛行機をチャーターして観光旅行にきたわけではない。

「生きて帰れるのかしら、私」

「…詳しくは社長から」

車は郊外のタワーマンションへ到着した。黒服の「…」の間が妙に怖い。

入り口では金属探知機のセキュリティチェック受けて、さらに指紋認証のドアをくぐる必要がある。黒服がエレベータのドアを開けると、いよいよ雪音に逃げる道はなくなった。

「こちらです」

「お……おじゃまします?」

最上階の部屋に入ると、広く取られた窓の向こうにテムズ川が広がっているのが見えてきた。先ほど見たロンドン橋もその一部を拝むことが出来る。

「…すごい部屋ね」

「高所恐怖症の私には辛い仕事場ですが…こちらへ」

黒服の意外な弱点に驚きながら案内された部屋からは、三味線の音が聞こえてきた。

「……円楽師匠?」

二人がリビングに入ると、ちよこんとソファーに座る少女の後ろ姿が見えた。机に積まれたDVDの山から見て、どうやらテレビの音は落語中継のようである。

「社長、お連れしました」

「えつと……Hello?」

雪音が声をかけても微動だにしない。

> i 3 2 3 5 9 — 2 3 2 4 <

「目が半開きですが……寝てますね」

黒服が少し申し訳なさそうにつぶやいた。

「(つたく…人をこんな形で呼びつけといて…) ちょっと、社長さん?」

雪音は回り込んで、テレビの前に塞がる。華奢な体の肩を軽く揺すりながら彼女は相手を観察した。

「（何…この肌のつやは）」

人形みたいに均整の取れた顔に、白人コンプレックスのある純日本人雪音は思わず引きそうになる。

「胸は…私の勝ちね！」

「……声に出てますよ、雪音様…」

黒服はこめかみを押さえながら呆れていた。

「かわいい顔して…この子ほんとに二十歳なの？」

雪音は無視して社長の頬をつつく。それにしても起きない。

「ええ」

「だいたいそのでっかい『大和魂』のＴシャツはなんなのよ…」

「社長の趣味です…ご勘弁を…社長、いい加減起きてください」

今度は黒服も一緒に肩を揺らす。

「……う…みゆ」

半分閉じていた薄目が開いた。抱きつきたくなるほどかわいい仕草にどぎまぎしていると、

「あれ…あなた…」

雪音は彼女の仕草に違和感を覚えた。

「はい…？」

不思議そうに首をひねる彼女の眼球は、黒目の部分が白く濁っている。

「…ごめんなさい…もう朝でしたか…」

そう言いながら彼女はガラスの外された時計を指で時計をなぞり確認している。どうやら…目が見えないらしい。

「…また落語鑑賞で徹夜ですか？」

「すいません、雪音に会えると思ったら、興奮して眠れなかったの
で」

電話で聞いた声は、まだ眠そうだった。

彼女は身をよじり眠気を飛ばすように「よし」と立ち上がる。

と、胸に手を当てぺこりと一礼する。

「神代雪音さんですね」

「は、はい」

やはり流暢な日本語である。落語仕込みかと、雪音は納得した。

「ルファ・クリフォードと申します。あなたの『half blood sister』になります」

「…はい？」

「…なんですと？」

聞き慣れない単語に雪音は固まってしまった。

一方ルファは雪音の声が消えたので、困惑している。

「つまり…」

落ち着いて雪音は翻訳を始めた。

「…えつと…halfは半分…bloodは血で…sister
って……」

「姉です」

ようやく言葉の意味がつながり

「あの親父か!？」

雪音は膝から崩れ悶絶した。

「……あの、大丈夫ですか」

「大丈夫も何も、東京からロンドン連れてこられて…親父に隠し子がいたあだあ!？」

「ええ、そういうことになりますね」

のたうち回る音に、怪訝な顔を浮かべルファが答える。

「雪音様、こういう時は素数でも数えて」

「ええい、どこでそんなこと覚えた、イギリス人」

黒服の提案で、お茶でも飲んで落ち着こうということになった。顔に似合わず優雅に紅茶を入れる偽ターミネーターはひとまず置いておく。

「少なくともルファ様のおっしゃることは事実です」

黒服は鞆から書類を取り出した。雪音の父の昔い写真で並んで写っているのは白人女性で、目の前の子とよく似ている。

「…そりゃ飛行機調達したり、こんな写真作ってまで…嘘をついてとは思わないけどさ…」

雪音は戸惑いながら事実を認めるしか出来なかった。それに目の前の子を見ると、嘘はついていないとは思えないのは確かである。

「私と似ては似つかないわね…」

「互いに母親似だと…聞いてます」

ルファは答えにくそうに少し口ごもる。

「（しまった…この子目が見えないんだっけ…）」

雪音は引きつったような顔で己の言葉に後悔した。ただでさえ生き別れの姉など…どう接していいのかわからないのに

「この通り目が見えないのであまり外に出れません、強引な手段を取ってしまいました」

追い打ちをかけるようにルファがすまなそうな表情で笑っていた。

「…ま、まあ…慣れてるからいいけどね」

「すいません…半年かけて、身辺調査して…あなたが苦勞してることは知ってましたが」

ルファの目にはうつすら涙が浮かんでいた。雪音はその真剣な表情に言葉を返すことが出来ない。

「今まで会うことを禁じられていて…父様が死んでようやく会えると知ったら、いてもたってもいられず」

手探りで雪音に抱きつくルファ。だが雪音には、これだけ大胆な手段で自分と会いたかったという彼女の真意がいまいち理解出来なかった。

「その割には偽のエントリーシートとか、ずいぶん周りくどい…」

「あの…誘拐とか拉致監禁等も検討しましたが、日本政府との調整がやっかいで…」

「検討したの!？」

どれだけ金と権力を振りかざしてるんだ、この娘っこは

雪音は頭を抱えながら少し声を荒げる。

「あの私…見えないから あなたの…声を聞いて、会う前にあなたのこと知リたかった……」

いたずら電話かけてみるとか、色々考えたんですけど…声を聞くためにどうしたらいいか考えたら、これしか穏便に済ます方法を思いつくかなくって」

ルファの声は声は震え、すすり泣き始めたいた。

「ごめんなさい、ごめんなさい 私の思いつきで迷惑かけちゃって泣きながら謝るその姿は雪音には『姉』ではなく、むしろ子供がいたずらがばれて親に泣きついてるようにも感じられた。

冷静に雪音はルファの行動を振り返る。そう……雪音の感じた違和感単に目が見えないということだけではなく、年相応でない幼さもあるのだろう。

「（この純情そうな子に、半分自分の父親の血が流れてるとはね）」

雪音は体の底から寒気を覚えた。彼女は少し躊躇してから、そつとルファの手を振りほどく。

「雪音？」

「気を悪くしたら悪いけど いきなり会ってべたべたと抱きつかれたり…その…姉さんとか…身内に思うのはちょっと……」

「う…そう…ですよね」

ルファは少しうなると、悲しそうに肯定し作り笑いを浮かべる。

その表情見て、雪音は予想通りの罪悪感に襲われた。

（第7話 終）

07・『異国の地。観光名所と父の形見』（後書き）

閑話休題その7

ルファ「初めてこのコーナーに出れますわ」

黒服「社長、おめでとうございます」

雪音「……」

黒服「雪音様、なにかご気分でも」

雪音「……あんた正式名称が黒服になってるじゃない」

ルファ「黒服さんは……黒服さんですわよ？」

雪音「……」

黒服「日本の有所正しき名前と聞いております。アレンというヒネリのない名より気に入ってるんですよ」

ルファ「私が名づけました」

雪音「日本でのイメージは……知らない方がいいわね」

ルファ「……？」

黒服「ところで次回は」

雪音「ついに私が就職します」

ルファ「雪音、おめでとう」

黒服「雪音様が日本で培ったサブカル知識をこの英国で活かす時がきました」

雪音「……ふっ……もう好きにして……」

ルファ「次回もよろしく願いますわ」

08・『仕事始め。金持ちに振り回され』

「社長秘書？」

「ええ、三点セットとして…社員証…仕事に使うタブレットPCと、あと護身用スタンガンも渡しておきます」

雪音は苦笑いしながら黒服からその三点セットとやらを受け取った。一緒に渡された本の束は、やたら分厚いパソコンの説明書と逆に薄い業務マニュアルである。

「…なんか、これじゃ何の仕事すればいいかわからないわね」

「慣れるまでは遊び感覚でいいですよ。名目上は私の部下になりますが、電話で説明した通り上下関係緩い職場ですから」

ルファは楽しそうに笑っていた。確かに社長という威厳も権威もなさそうである。

「確認だけど、就職つてのは嘘じゃないのね…」

「ええ、私が日本人の『オタク文化』アドバイザーが欲しかったのは間違い無いですから」

「…さいですか」

雪音の脳裏に最適任者の顔が浮かんた。後輩に引きずられてオタクの世界に片足突っ込んでいることは認めているが、別に専門家ではない。

まあ外国人に助言する分にはなんとかなるだろうと、自分を騙しながら雪音は会社概要のパンフレットを読み始めた。

会社の仕事内容はイベント企画と運営である。彼女の母が設立して現在は筆頭株主に付いている。二頁目には大きく伯爵の写真が飾られ、一族企業をこれでもかと言わんばかりに強調している。

「（社員数…五名って…）」

雪音に日本流の「丸投げ」という言葉が浮かんたが、やはり気にしないことにした。

「社長秘書の肩書きは私と同じです。雪音様には社長の公私のサポートと身辺警護をお願いします」

今度は黒服が名刺の束を雪音に渡した。用意周到である。

「身辺警護ついていわれても……」

不安がる雪音に首をかしげながら書類をめくる黒服。

「おかしいな…雪音様は剣道の経験がある日本のクノイチと書いてあります…」

「かんざし一つで人が殺せるんですよ」

「なんか色々混ざってるから、それ！」

肩から息を切らしながら雪音が叫ぶ。偏った日本知識の矯正も、どうやら彼女の役割のようだ。

「まあ、ロンドンとは平和な街ですから」

「そうそう、ちんけな暴動ぐらいしか起こりませんよ」

気楽な顔で笑う二人と対照的に雪音は不安だった。

異国の新しい生活への順応でやはり問題になるのは日常会話である。所詮は生活圏で使っていない言葉だ。雪音は少し英語が出来る分、逆にもどかしい思いをしていた。

家ではルファや黒服がほぼ完璧な日本語をしゃべるので、たまに落語調が入るものの…問題はない。だが一歩外に出ると洪水のように慣れない言葉と文化が雪音に襲ってくる。

「（引きこもりには辛い環境よね…）」

雪音はとりあえず自虐的に笑う。

それはさておき、今日は家の一階下の事務所で社長補佐の仕事をすることになっている。朝一の仕事で彼女はパシリとして近くのスタバでコーヒーを買い込んで仕事場に戻った。

「さて、お話の続きですが」

仕事自体はタイプやホームページや書類の読み上げ、お茶くみ、ルファの話し相手といった簡単なものである。黒服は「女子会（藁）

とやらをお楽しみください」とと外回りに出かけていた。

恐らくルファの話し相手に疲れたのだらうと雪音は勝手に推測している。

「ルファ…コミケの話はもういいから…仕事しよ…」

働き始めてから一週間、仕事一割の雑談九割といった感じで雪音自身も正直、疲れてきている。

「はあ…では…明日の夕方の新人バンドコンクールの視察ですが…」
渋々といった表情を隠さずルファはパソコンにつながれたイヤホンで電子メールを開封する。ボタンひとつで彼女のかわりにメールを読み上げる優秀なソフトがパソコンに入っていた。

「あら…雪音が提案した文化ニユース枠での告知で、チケットの売上が上がったみたいですね」

「日本でよくやる手なのよ…珍ニユースに偽装した宣伝は」

雪音は苦笑した。こういう風に別視点からイベントを盛り上げた売り込む方法も、英国人には新鮮に映るらしい。

題材が日本のアニソンを歌う外国人バンドなので、むしろ日本で売り出した方が楽かもしれないが…

「明日の予定はあと…教習所？」

「黒服さんの車で雪音が運転します」

「…いや、聞いてないし」

笑顔でのたまうルファに雪音は思わずのけぞった。

「我が社のモットー、週に一度のドッキリです」

「…一日一回の間違いでしょ」

肩をすかしながら雪音が答えた。そもそも始まりがドッキリみたいなものだったので、段々慣れてきたようである。

こんな感じで毎日が続いている。雪音にしてみれば戸惑うことは多いが、アパートで寝込んでいるよりはましである。

ルファの穏和な性格にもいやされるし、仕事をしているという充実感もある。

「さておき、昨日の続きだけど…」

その後二人は無駄話を交えながら、一日を書類作りに費やした。

階段一つで職場と住居がつながっていることは便利である。ルファのように日常生活にも支障がある身ではなおさらである。

家具や部屋の数は最小限に設計されており、無駄に開放的なダイニングキッチンと、ゲストルームを含めた寝室三部屋で構成されている。

同居人になった雪音にとって広々とした部屋は居心地が悪い上に、部屋にあるものを全てをルファのために同じ場所に置かなくてはならないルールが彼女の神経をすり減らしてはいるが…

元来いい加減な性格の雪音にとって、仕事よりも生活の方が順応に時間がかかるようである。

「えつと…『ノートパソコン、開封厳禁の箱（その2）、ミシンと裁縫セット』つと…」

台所で雪音はメールを打ちながらパスタをゆでていた。メールの中身は後輩の夏代に航空便で送ってもらった物資のリストと、細かい事情の説明文である。

事情は説明したところで信じてもらえるか怪しいが…事実なのでそのまま伝えることにした。

「あとは大根をおろして…」

台所も几帳面に物が並べられている。雪音はおろし金の代わりにフードプロセッサーを使い器用に大根を砕いていた。

この一週間で食事の担当はルファから雪音に完全に移行している。

「イギリス人」料理音痴のイメージ通りルファの作る食事に雪音がキレたからだ。

「そこまで言うなら雪音が作ってみてください」と挑発され、ありったけの材料で日本食のフルコースを作ったのが失敗の元である。

その後ルファに食事の概念を二十年間違えていたと泣かれ、食事当番を一手に引き受けることになってしまったのだ。

「（とりあえず忙しい時はデリバリにしよう）」

雪音は二人分の和風パスタを作り終え、一つにラップをかけて冷蔵庫に入れる。ルファは少し仕事が残っているからと、まだ事務所にいたから今日は一人で夕食である。

それに一抹の寂しさを感じるようになったのも、ここ一週間の変化なのかもしれない

彼女は黙々と食事を終えると、先ほど作ったメールを転送して就寝の準備をする。薬頼みの睡眠が期待出来ないなので、眠い時に寝るに限るのだ。

食後にすぐ寝るのは 病的に体重が減っていたのでちょうどいい。
「お風呂は朝に入ろう…」

人の家だから光熱費は気になくていい。温まったパスタをそのまま冷蔵庫に入れても、風呂に一日何回入ろうと好き放題である。受話器で下の階を呼び出すと黒服を経ず直接社長につながった。

「ルファ、先に寝るけどいい？」

「大丈夫ですよ、私はちよつと時間がかかりそうなので…」

睡眠に関しては二人は同じ主義だ。「すなわち寝たい時に寝る」である。

雪音は時差ボケと日本での怠惰な生活で、ルファは視覚障害者が抱える「光に当たれない」事情で、それぞれ睡眠リズムが崩れていた。
「手伝った方がいい？」

とはいえ仕事となれば事情は別だ。念のため雪音は自分が必要か尋ねてみた。

「い…いえ、練習には十分な睡眠が必要ですからね」

ルファの声はうわずっていた。またドッキリが待っていると聞いて、雪音はそれも楽しくなってきた自分に不思議な気分を覚える。

「わかった、おやすみ」

電話を切ると、雪音はそのまま布団に潜り込む。耳の疲れを取るためにテレビは日本の衛星放送に合わせたままなんとか眠りについた。

イギリスの免許制度は日本に比べ単純である。お金を払えば仮免許が届き、隣に免許を持った人を見ればそのまま路上で練習が出来る。

自信がついたら本試験を受け合格すればそのまま免許が交付される。外国人の場合就業ビザなど面倒くさい手続きも当然必要だが、そこから辺はルファや黒服が全て処理済みである。

原付免許しか持っていない雪音にとって、いきなり車に乗れというのはなかなかハードルが高い行為だが、まずは動かしてみないことには始まらなかった。

「ということで、広い駐車場に車に慣れてから路上に出ます」

「へえ…このシルバーストーンって…駐車場だったんだ」

明け方に車に乗せられ雪音が連れてこられたのは貸し切りのサーキットだった。

「車の操作を覚えるのにはスポーツ走行が一番です。流れに合わせてたり交通法規に従うにも車がどのように走り、止まり、回るかを理解してからです」

「回る……ねえ」

路上教習の教官こと黒服所有の車がご丁寧にスタートラインに止められた。

黒服は運転席から降りるとそのまま助手席の方に回り雪音に移動するよう促す。本気でこの車で走れということらしい。

「…これ、確か日産の一千万ぐらいする車じゃなかったっけ」

「ニッサンGT-Rです。雪音様になじみ深い日本車ですし、コンピュータ制御でスピンすることは滅多にありません。安全ですよ」

「この車、ジャガーと違ってシートが堅いですわね」

ルファも楽しそうに後部座席に座っていた。相変わらず…何度思ったかわからないが……金持ちのやることはわからない

あきらめにも似た境地で運転席に座ると雪音はベルトをきつく閉

める。新聞配達のカブしか動かしたことないのに、何故私はここにいる…と叫びたいところである。

「では最初はゆっくりと……三速より上のギアは使わず一周してみましよう。発進はTSCモードで六千でギアを…」

「（こんなの自動車教習じゃない…）」

言われた通りアクセルを踏みメーターの回転を合わせる。発進モードの設定を間違え、空転しないはずのタイヤが軽く空転しながら車が走り出した。

雪音の体力の限界までサーキットを走らされた後、黒服の運転で今日のコンサート会場近くのレストランで昼食をすませた。

食欲はそれほど湧かなかったが、とりあえず何か食べないと動けないほど雪音の神経はすり減っていた。

会場についてもまだ体が揺れているようだった。

「首が痛い…」

さすがハイパワーの高級車である。ゆっくり走る分には楽しかったのだが、黒服の指示通りにギアを入れメーターが二百キロを指した時には、泣きたくなくなってしまった。

途中で「用事がある」とタクシーでその場を抜け出したルファの根性にも感服である。

「黒服さん、昔ラードライバーを目指していたんで…運転に関しては頭のネジがたまに……」

苦笑しながら堂々とのたまうルファに雪音の頭はさらに痛くなった。知っているなら止めて欲しいものである。

「一度恐怖を味わえば、路上も怖くないですよ」

「正直二度と車に乗りたくないんですが…」

ため息をつきながら雪音は書類をめくる。今日の午後の仕事はコンサートイベントの管理とあるが、実質ただの視察である。

…もっとも社長のルファはノーマライゼーション担当となっている

ので、それなりに忙しいようだ。白い杖を突きながら会場をうろろしている。

雪音はその後ろから倒れてもかばえるように待機して後ろに続いた。
「ルファ！」

背後からぞろぞろと人がやってきた。今日の主役のメンバーで、一番前にいた女性は着物らしきものをまとっていた。

「あら、久しぶりですわ」

「ルファも久しぶりね、最近サークルの会合にこないじゃない」

メンバーは皆ルファの知り合いのようで、コスプレの格好のまま親しげに挨拶を交わしている。

と、その中の一人が雪音の方をじろじろと見だした。

「この子？」

「ええ、日本から雇った秘書の雪音です」

ルファの言葉に、メンバーの目が一気に輝いた。しきりに雪音の顔や体を見回し、

「ああ…生で日本人レイヤーに生きて出会えるとは」

と少しヤバイ表情で法悦している男もいた。

「ようこそ我が大英帝国へ」

敬礼とともに軍服姿の女性メンバーから握手を求められる雪音。

顔が引きつらないように押さえることが出来なかった。

「いや、私はそんなたいそうなものじゃ…ゴシックに関しては皆さんの方全然レベル高いですよ」

相手をほめて時間を稼ぎながら雪音ははぐらかすことにする。夏代以上に深く関わりたくない空気を持っていたからだ。

今日のパンフレットに目を通すとこの連中は……ジャパンフリークサークルの中でコスプレ好きとバンド好きが集まって日本のアニソンを歌うグループを作った……とのことである。

つまりはイギリス版『アニメタル』らしい…

「でも…彼女は今日はコスプレじゃないんですか」

「今日はって…仕事に来てるのにコスプレ姿はないでしょうが…」

呆れる雪音に着物のリーダーらしき女は首をかしげながら紙を一枚渡す。どうやら名簿らしい。

「そんなこと、うちの会員なんだから気にしなくても」

「いつ加入した!？」

雪音があわてて名簿に目を走らせると、自分とルファの名前がしつかり入っていた。

「腹違いの妹が日本でコスプレやってると言ったら……こうなりまして……はい」

さすがにルファも申し訳なさそうな顔をしていた。

「聖地からやってきた東洋の女剣士って……あんたら」

プロフィールがむちゃくちゃである。部活で強制的にやらされた剣道経験を歪曲され、竹林をバックに胴衣姿のアイコラが名簿の隅に作られていた。

「(日本人は竹刀で人が殺せると思われてるから困るわね……)」

雪音がそのどう処理していいかわからない写真を見ていると、少し息の荒いメガネの短髪が「それ、僕が作りました」と言ってきた。雪音は迷わずタブレットPCの角で喉を突く。

「おお」

悶絶する男と、羨望まなざしのまま拍手を送るメンバーに言いしれぬ寒気を感じる雪音。まあ、あれだ……アーティストってのは変人の集まりだ

「ちなみに日本に彼氏いるから、手出し無用よ!」

咳き込む男に人差し指を突きつけ雪音は冷たく言い放った。たまにメールのやりとりをするので嘘ではない……たぶん。

ちなみに、こうでもしておかないと自分の身が危ない気がするからと言いついてはいるが……地面でのたうち回ってる英国人男性に、ちよつとだけ「Sっ気」が疼いたのは乙女の秘密である。

(第8話 終)

08・『仕事始め。金持ちに振り回され』（後書き）

閑話休題8

ルファ「今回は話自体が『ロンドン編導入小ネタ集』でした」

雪音「私がルファに振り回されている編ともいう…」

ルファ「振り回してるんですか、私」

雪音「自覚がないんかい！」

ルファ「些細なことは気にしないことにしております」

雪音「はあ…そうですか」

ルファ「さて、次回ですが…」

雪音「ロンドン編小ネタその2…」

ルファ「まだ振り回されるんですね」

雪音「（いつかしばく…）次回もよろしく願いします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4104w/>

何だかんだで生きている

2011年10月9日03時12分発行